# 標津の竪穴

## — 昭和52年度標津町内遺跡分布調査事業発掘報告書 —

1 9 7 8

北海道 標津町教育委員会

# 標津の竪穴

― 昭和52年度標津町内遺跡
分布調査事業発掘報告書 ―

１　９　７　８

北海道　標津町教育委員会

# 遺跡究明の幕あけ

北海道の中でも、北海道らしい風物や情緒が残されている、と言われる東端の地、標津町は、指呼の間に「北方領土　国後島(クナシリ)」が望めるところで、歴史的・考古学的にも最近注目をあびている町であります。

これらを立証するように、町内各所には、縄紋・続縄紋・オホーツク文化時代等々、様々な埋蔵遺跡が散在し、その数は大旨3000ヶ所以上といわれ、しかも原始そのままの遺構が肉眼ではっきり確認できるのが常であります。社会状勢の変化と開発の波及との前に、歴史のある町として、この重要な先史文化遺産をどう保存整備するかは、焦眉の急となっているのであります。

時あたかも文化庁・北海道教育委員会をはじめ、全国有数の研究者の注目をあつめて、これらの早期保存が焦点化され、昭和52年度、文化庁は、全国初のモデルケースとして、標津町で「広域遺跡保存対策調査研究」をおこなうことになりました。この一環として遺跡の学術発掘調査が実施されることになり、文化庁保護部横瀬庄次記念物課長・小林達雄調査官をはじめ、各位の理解のもとに、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター佐原　真・西村康、平城宮跡発掘調査部岡本東三の3氏を中心とする発掘調査が、東北海道のすばらしい秋空のもと、快調に開始されました。直接に担当いただいた前述の諸氏の御努力はもとより、道東の研究者同志諸君多数の献身的な御支援にさゝえられ、予期以上の学術的成果がえられましたことに、心より感謝しているところであります。

吾が町における文化財の実体究明は、ここに大きく前進したのであります。これを手始めに、いよいよ本格的な調査研究にスタートしなければならないと存じます。

各位のこれまでに寄せられた御理解と御協力、これにも増して心暖まる御指導は、今後の町文化財行政の推進に「方向と確信」を与えて頂きました。重ねて今後の御理解と専門的分野からの御教導とをお願いし、発掘調査報告の扉と致します。

昭和53年3月

標津町教育長　柳沢　巽

# 標津の竪穴

## ― 昭和52年度標津町内遺跡分布調査事業発掘報告書 ―

## 目　　次

# 図　版

# 挿　図

## 調査関係者リスト

### 標津町広域遺跡保存調査研究会

**研究会メンバー**

高倉新一郎（北海学園大学学長）・足達富士夫（北海道大学教授）・田中　琢（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長）・北構保男（北海道文化財審議会委員）・松江昭夫（北海道生活環境部長）・岩田弘志（北海道商工観光部長）

**専門調査委員**

岡田宏明（北海道大学北方文化研究室助教授）・藤本　強（東京大学常呂研究所助教授）・前田　潮（筑波大学助教授）・沢　四郎（釧路市博物館長補佐）・新庄久志（釧路市博物館学芸員）

### カリカリウス第2遺跡・チシネ遺跡発掘調査関係者

**事務局**

柳沢　巽（教育長）・木下　孝（次長）・亀子亮三（中央公民館長）・福田　隆（社会教育課長）

宮川協三・亀浦忠夫・今野　崇・本間留治・浜向　傑・音川好正・分銅政司・南保吉行・太田和義・大内正美・斎藤俊己・菅原克己・渡辺昭一・我妻武志（社会教育課職員）

**発掘担当者・発掘調査員**

佐原　真（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部集落遺跡研究室長）
西村　康（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部測量研究室技官）
岡本東三（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第3調査室技官）
大島直行（北海道教育庁社会教育部文化課文化財保護主事）
西　幸隆（釧路市博物館主事）
山本文雄（釧路村教育委員会社会教育係主事）
豊原煕司（標茶町郷土館）
福士広志（浜中町教育委員会社会教育係）
湧坂周一（羅臼町教育委員会学芸員補）
椙田光明（北海道大学北方文化研究室）

太田弘子・恩田信子・白戸くみ子・田村公子・守田とし子

# 例　　言

1　文化庁は、1977（昭和52）年から、広域遺跡の保存対策をはかるべく、調査研究を実施する運びとなった。

この、広域遺跡保存対策研究の趣旨は、遺跡が一市町村域を中心に集中していて、それらの遺跡をとりまく周辺の環境が良く保存されている地域を対象として、遺跡の全体的な保存計画及び整備・活用の計画を策定するとともに、さらに当該地域における各種開発事業との総合的な調和を図るための調査を行うことにある。

2　1977（昭和52）年度は、北海道標津（しべつ）郡標津（しべつ）町域が、同調査研究の対象地域としてえらばれ、その調査研究の一環として、伊茶仁（いちゃに）カリカリウス第2遺跡（熊谷牧場構内）の竪穴群、および伊茶仁（いちゃに）チシネ遺跡（十条製紙株式会社用地内）の竪穴群のそれぞれにおいて、竪穴住居跡1基ずつを発掘調査する運びとなった。本報告書は、その調査成果の概要をまとめたものである。

3　本報告書は、佐原　真・西村　康・岡本東三・椙田光明が、協同でまとめた。

4　調査実施中、火山灰にかんしては北海道根釧農業試験場山口　宏氏の御教示を得た。なお竪穴内の堆積土についての調査は、国際キリスト教大学考古学研究室の千浦美智子氏および、大阪市立大学植物学研究室粉河昭平氏に依頼した。これについては、別途報告する予定である。

5　出土遺物のうち土器の整理・実測・製図については、沢　四郎・吉田恵二氏、石器の整理にかんしては、松沢亜生・岩本圭輔・上野秀一氏、編物については藤本英男氏の御教示・御協力を得ることができた。

遺物の写真撮影は、佃　幹雄氏によるものである。

6　発掘調査および、その成果をまとめるにあたっては上記の諸氏、調査実施に種々の便宜をはかられた十条製紙株式会社・熊谷牧場、熊谷栄一氏および別にかかげる調査研究会の研究メンバー・専門調査委員諸氏、ならびに調査関係諸氏の心からなる御指導・御助言・御協力を得ることができた。この機会に各位の御厚情にたいして、あらためて謝意を表する次第である。

7　1977（昭和52）年10月27～29日、標津町において開催した文化庁主催の広域遺跡保存対策研究会の概要にかんしては、別に報告書が作成されているので、あわせて参照されたいと思う。

# Ⅰ 遺　　跡

## A　遺跡の位置

北海道根室支庁標津郡標津町は、知床半島と根室半島とを結ぶ海岸線が形づくる弧線のほぼ中央に位置しており、東の海上に国後島を臨む町である。

標津の町から海岸沿いに国道335線を北に向い、標津川を渡るとまもなく500ｍの西方（左手）に、草地・湿原をへだてて雑木林がみえてくる。これが、伊茶仁カリカリウスの竪穴群が立地する低い海岸段丘（標高17～20ｍ）であって、現在、十条製紙株式会社の所有林となっている。段丘の下には、伊茶仁川の支流ポー川が蛇行しており、その手前の湿原とともに絶好の景観を形成している。

国道335線をさらに北進して伊茶仁川をわたると、道は２つに分岐し、北（右）へ進むと羅臼、西（左）へ折れ（国道244号線）ると斜里にいたる。この分岐点から西 1.5㎞いった右手（北）に熊谷栄一氏が経営する牧場がある。この牧場の敷地に伊茶仁チシネ第２遺跡があり、湧水から流れる小川の北岸の雑木林（標高8.5ｍ）の中に約 150基の竪穴群が存在している。

## B　標津町における従来の遺跡調査

標津町に大規模な竪穴住居跡群が存在することが知られたのは、比較的古いことであって、1919（大正８）年ころ、佐藤直太郎氏がおこなった踏査が、学術的認識の始まりであろう。しかし、その存在が広く知られるようになったのは、近年になってからである。

1963（昭和38）年、大場利夫は、遺跡の分布調査をおこない、茶志骨の周辺で、タブ山遺跡・会津藩陣屋跡、伊茶仁川沿岸で伊茶仁ふ化場（孵化場）第１遺跡・伊茶仁チシネ第１遺跡などを調査された。とくに伊茶仁ふ化場第１遺跡においては、環状土籬の発見があって注目をひいた。記録によると、この環状土籬は東西32ｍ、南北27ｍの円形に、高さ約50㎝、幅２ｍの土堤がめぐり、西に開口部分があったことが知られる。

1964（昭和39）年、沢　四郎氏らは、野付半島で近世の集落跡・陣屋、茶志骨川・当幌川流域でチャシ・竪穴を調査し、古老の聞きこみ調査等もおこなっている。

1968（昭和43）年、開町90周年をむかえた標津町は、北構保男氏に依頼して町内の遺跡分布調査を実施した。これによって発見された三本木遺跡においては、試掘によって、オホーツク文化の竪穴住居跡の存在が確められている。町では、この年、遺跡保存対策の第

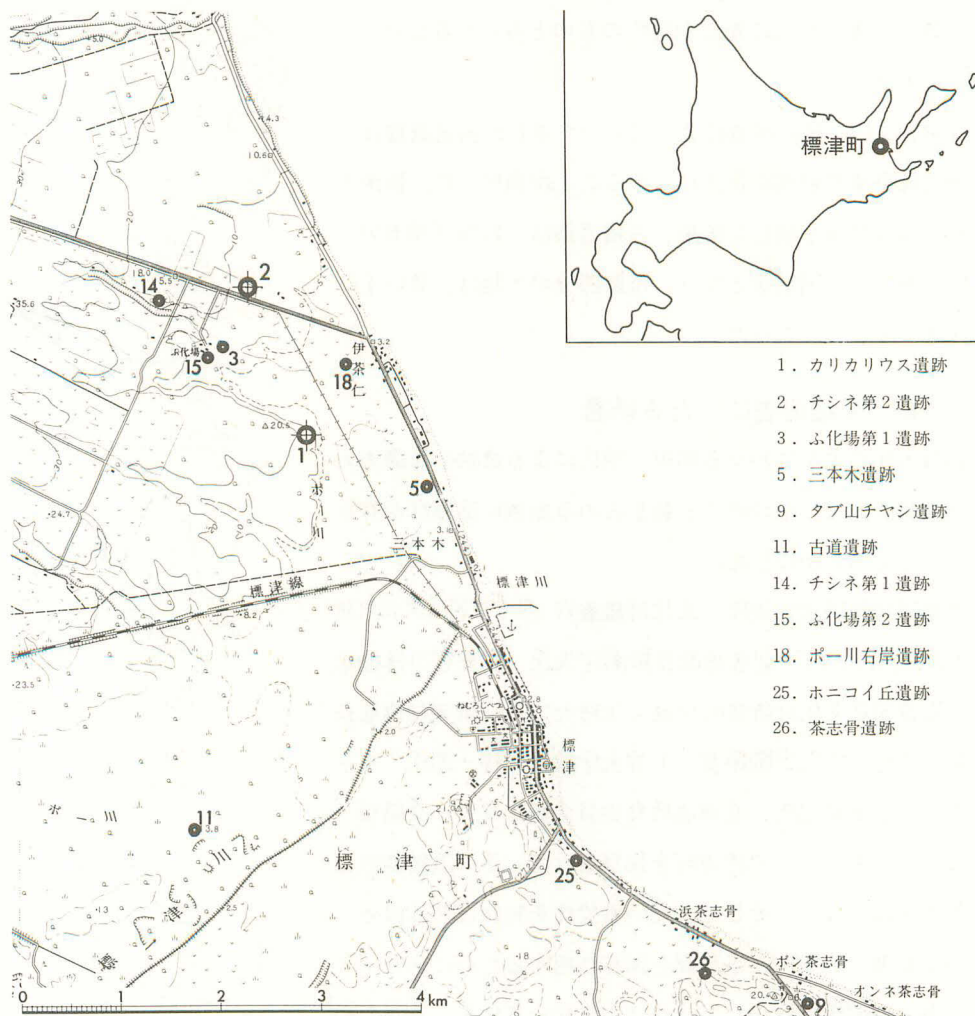



Fig. 1　遺跡の位置　縮尺1/75000　(29ページ、注2参照)

一歩として、各遺跡に標柱等をたてて遺跡であることをしめした。

1971・1972（昭46・47）年、伊茶仁チシネ第1遺跡（伊茶仁B地点）が草地改良によって破壊される危険を生じた。町では石附喜三男氏を担当者とする発掘調査を実施して、擦文文化・オホーツク文化の関係を考えるうえで興味ある成果を得ることができた。

このような積み重ねの上にたち、1974・1975（昭和49・50）年には、前田　潮氏に依頼して、竪穴住居群の全体像をとらえるための分布調査と測量調査とを実施した。この結果、全町にわたって19ヵ所の竪穴住居群およびチヤシの存在を確認し、また竪穴住居跡の全貌を把握するのにじゅうぶんな分布図も完成することができた。そして標津町の竪穴住居が多くは方形の平面形をもつことによって、擦文時代に所属することが想定されるようになり、さらに、伊茶仁カリカリウス遺跡・伊茶仁フ化場第2遺跡などにみられる円形の竪穴

住居跡は、擦文時代に先だつ時代のものとみられるにいたったのである。

なお、この一連の調査によってみいだされた古道遺跡は、草地造成事業の範囲に含まれていることが判明した。折衝を進め、保存対策を講じた結果、古道遺跡は、1976（昭和51）年、史跡として国指定となり、遺跡部分の土地は、買い上げて保存することになった。

## C　発掘調査にいたる経過

1974・1975両年にわたる前田　潮氏による遺跡分布調査および測量調査は、標津町の広範を占める地域に遺跡群が存在することを明らかにした。

文化庁次長柳川覚治氏、文化財鑑査官（現奈良国立文化財研究所長）坪井清足氏、記念物課長横瀬庄次氏、調査官小林達雄氏、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長田中　琢氏ら文化庁関係者、上智大学教授八幡一郎氏、東京教育大学岩崎卓也氏、北海道教育委員会藤本英夫・高橋稀一氏などは、あいついで標津町を視察されて、その遺跡群の重要性を指摘された。そして、その重要性を知れば知るほど、この広範囲に分布する遺跡群を保存活用するためにあたっては、多くの問題を解決しなければならないことを、あらためて認識させられることになったのである。

1977（昭和52）年、文化庁が第1回広域遺跡保存対策研究調査会を標津町で開催する運びとなったことは、本町にとっては時宜を得た幸いな企画であった。この時にあたり標津町は、従来、所属年代についてじゅうぶんな資料を得ていない伊茶仁チシネ第2遺跡・伊茶仁カリカリウス遺跡の実体を把握することを目的とし、かつまた研究調査会に資料を提供するため、国の補助をうけて両遺跡においてそれぞれ1基ずつの竪穴住居跡を発掘調査することにしたのである。(椙田光明)

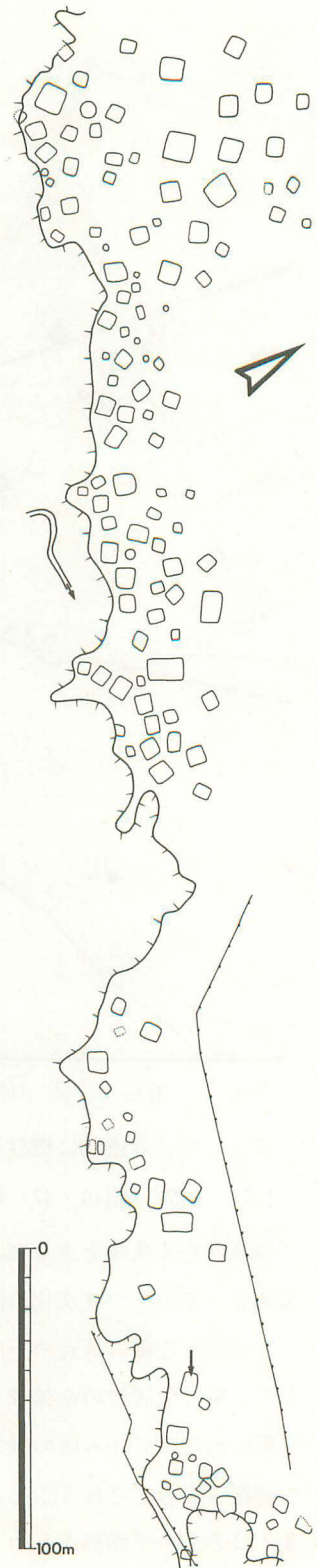



Fig. 2　チシネ第2遺跡竪穴群の分布（前田　潮氏原図　西村製図）　縮尺1/2520
今回調査した竪穴は↓でしめす

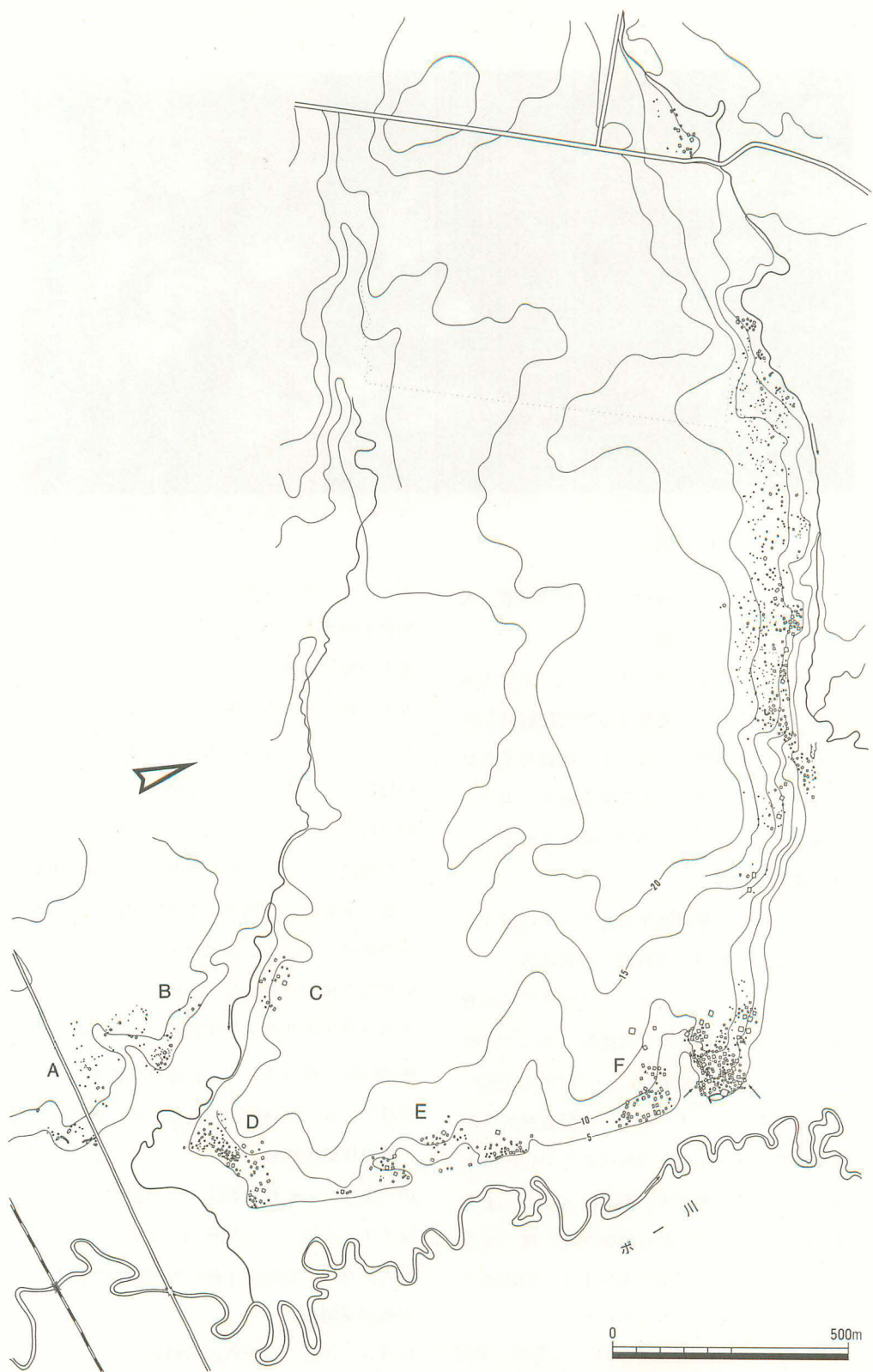



Fig. 3　カリカリウス遺跡竪穴群の分布（前田　潮氏原図　西村製図）　縮尺1/13700
今回発掘した竪穴はF群東部にあり、2つの↑によってしめす

Fig. 4　チシネ第2遺跡第1号竪穴　清掃中

## D　調査日誌

10月5日　佐原・西村・岡本標津到着。大島・山本と合流。発掘打ち合せ。

10月6日　伊茶仁チシネ・カリカリウス両遺跡の下見を行ない発掘する竪穴住居跡を決める。チシネ遺跡では長方形住居跡をえらび、カリカリウス遺跡では方形住居跡をえらぶ。下草清掃。水準点・三角点の確認を行なう。

**チシネ第2遺跡**

10月7日　測量の基準点を2ヶ所に設ける。調査前の竪穴の落込み状況の写真測量。

10月8日　再度、3コースに分けて写真測量を行なう。発掘前の写真撮影。竪穴の方向にしたがってそれを中心に10×12mの発掘区を設定する。四分法を用い、土層観察用の畦によって4分された4つの区画を便宜的に東南区・東北区・西南区・西北区とよぶ。まず東北区（6×6m）から発掘開始。覆土は中心部で浅く、壁際で厚く堆積する。約15cmでオレンジ色火山灰があらわれる。

10月9日　東北区・西南区・北西区・東南区の順に覆土を掘り下げる。北西区まで発掘完了。住居跡内は黒色土→灰白色火山灰混り黒色土→オレンジ火山灰のブロックを含む黒色土の順に堆積する。現在、オレンジ色火山灰土上面でとめる。覆土中より後北$C_2$式の土器片一片出土。他は拳大の自然礫多し。

10月10日　雨のため作業中止。

10月11日　オレンジ火山灰上面が床面かどうか解決するため一部を掘り下げ、その結果、床面であることが判明。東南区床面で一個体分の擦紋土器出土。住居跡床面を掃除しながら柱穴を検出。第2号住居跡は黒色土中に切り込み面があり第1号住居跡より新しい。

標津町社会教育委員・公民館運営審議委員一行見学。夜、小林達雄・安原哲示・高橋稀一・竹田輝雄氏到着。

10月12日　写真撮影後、土層図を描き畦をはずす。遺物なし。炉検出できず。

10月13日　発掘完了後の写真測量を行なう。平板測量開始。

10月14～16日　平板測量継続。

10月20日　終了写真を撮影し発掘調査完了。

**カリカリウス遺跡**

10月14日　　写真測量の準備作業。平板実測用の測点を設ける。根室管内文化財担当者、標準町文化財専門委員見学。

10月15日　　発掘前の写真撮影。雨のため作業中断。午后、写真測量用のターゲットをうつ。根室管内報道関係者一行29名遺跡見学。

10月16日　　写真測量完了。午后より9ｍ×10ｍの発掘区を設定し、四分法で西北区から発掘はじめる。土層観察用畦によって4分される各辺を便宜的に、東南区・東北区・西南区・西北区とよぶことは、チシネ第2遺跡の場合と同様である。覆土下15cmで床面となる。チシネ遺跡・カリカリウス遺跡現地説明会。

10月17日　　プランを確認するために壁面を検出する。覆土中より縄紋土器・続縄紋土器擦紋土器片・石刃・石核・石鏃出土。床面直上より炭化材や茅状の炭化物、編物なども出土。坪井清足氏視察。

10月18日　　住居跡の輪郭をつかみ竪穴中央部から外周にむかい床面清掃。東南区に炭化材多量に出土。焼失住居か。平板測量開始。

10月19日　　住居跡床面、柱穴ほぼ検出。東壁中央の竈の発掘にかかる。

10月10日　　土層を測り、写真撮影後、畦を撤去した。再度、全景写真撮影。

10月21日　　竈の焚口からほぼ一個体の擦紋土器出土。竈・煙道部ともに天井は落ちこむ。竈の下底部は焼土となり、骨片を含む。竈の写真測量を行なう。根釧農業試験場山口宏氏火山灰調査。

10月22日　　焚口の土器を実測し取り上げ、竈の写真撮影。調査完了。

11月7日～11月8日　　埋め戻し。（岡本）

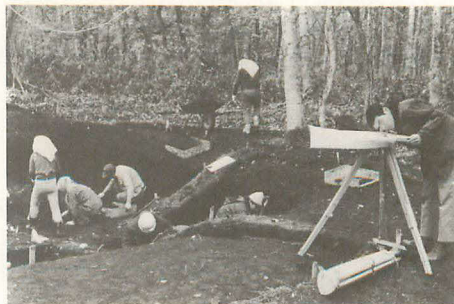



Fig.5～8　カリカリウ遺跡第1号竪穴
鍬入式・平板測量・四分法発掘・竈

## E　伊茶仁カリカリウスの竪穴

伊茶仁カリカリウス遺跡の竪穴は、海岸段丘の北側斜面から東側斜面に連続する長さ約2kmの範囲に、数十基ずつ群在する状況で分布しており、その総数は1500にたっしている。

遺跡は、現在、十条製紙株式会社所有の雑木林となっている。この林は第2次林であって、樹令50年ていどのカバ・ニワトコ・ナラ・キハダから成っており、クマザサが下生えとなっている。

竪穴は、スリ鉢状の大きな凹みとして残り、周囲には、竪穴を掘るために盛りあげた土が土手状にのこっている。竪穴の深さは、周囲の盛土の上面までふくめ、1～2m、なかには2.5mにたっするものもある。

立木の大多数は、竪穴の外に生えており、竪穴中央に立つものはすくない。

前田　潮氏による測量調査は、クマザサが生えている悪条件下でおこなわれた。しかし今回は、標津町教育委員会の努力によって広い範囲にわたって下生えの刈り取り作業がおこなわれた結果、竪穴のくぼみの群在状況を一望のもとに見渡せるようになり、壮観を呈した。このような好条件のもとに平板測量を実施できたことは幸いであった。

今回、発掘対象としてえらんだのは、このうち東側斜面北端の小支丘に密集する200軒ほどの1群（前田　潮氏のf群北半）の1竪穴（Fig.3に2つの↑によってしめす）であって伊茶仁チシネ第2遺跡における場合と同様、写真測量用の支柱として利用できる立木の状況によって適当な竪穴をえらんだ。発掘前の竪穴の深さは周囲の地面から約95cm、盛りあげた土手は高さ約25cmである。

第1号竪穴住居跡（PL.1－2、PL.2～5、Fig.10～14)は東西5.4m、南北5.5mの方形住居で、東壁中央に竈をもつ。住居跡内の覆土は中央部で約20cm、壁際で約1m堆積しており、現状では、すり鉢形を呈している。

覆土は基本的に5層に分かれる。第1層は草根を含む腐植土、第2層は暗茶褐土、第3層は住居跡中央部にのみ堆積する暗褐土、第4層は壁際の上層に堆積する黒色土、第5層は下層に堆積するオレンジ火山灰（Ma-ghi, P13参照）のブロックを含む黒色土である。床面は暗褐色火山灰上面にある。住居跡の切り込み面は灰黒色火山灰（Km-2a～c）上面からつくられ、床面までの深さは約80cmである。壁は南壁で一部崩壊しているものの、ほぼ垂直に立ち上る。

覆土中には縄紋・続縄紋・擦紋・オホーツク式の各時代の遺物が混入していた。

床面の竈焚口から1個体の擦紋土器（PL.8・Fig.23－1), や編物（PL.5－2)、若干の石器類が出土した。また、床面直上からは、上屋の部材と考えられる炭化材や屋根に葺いたと

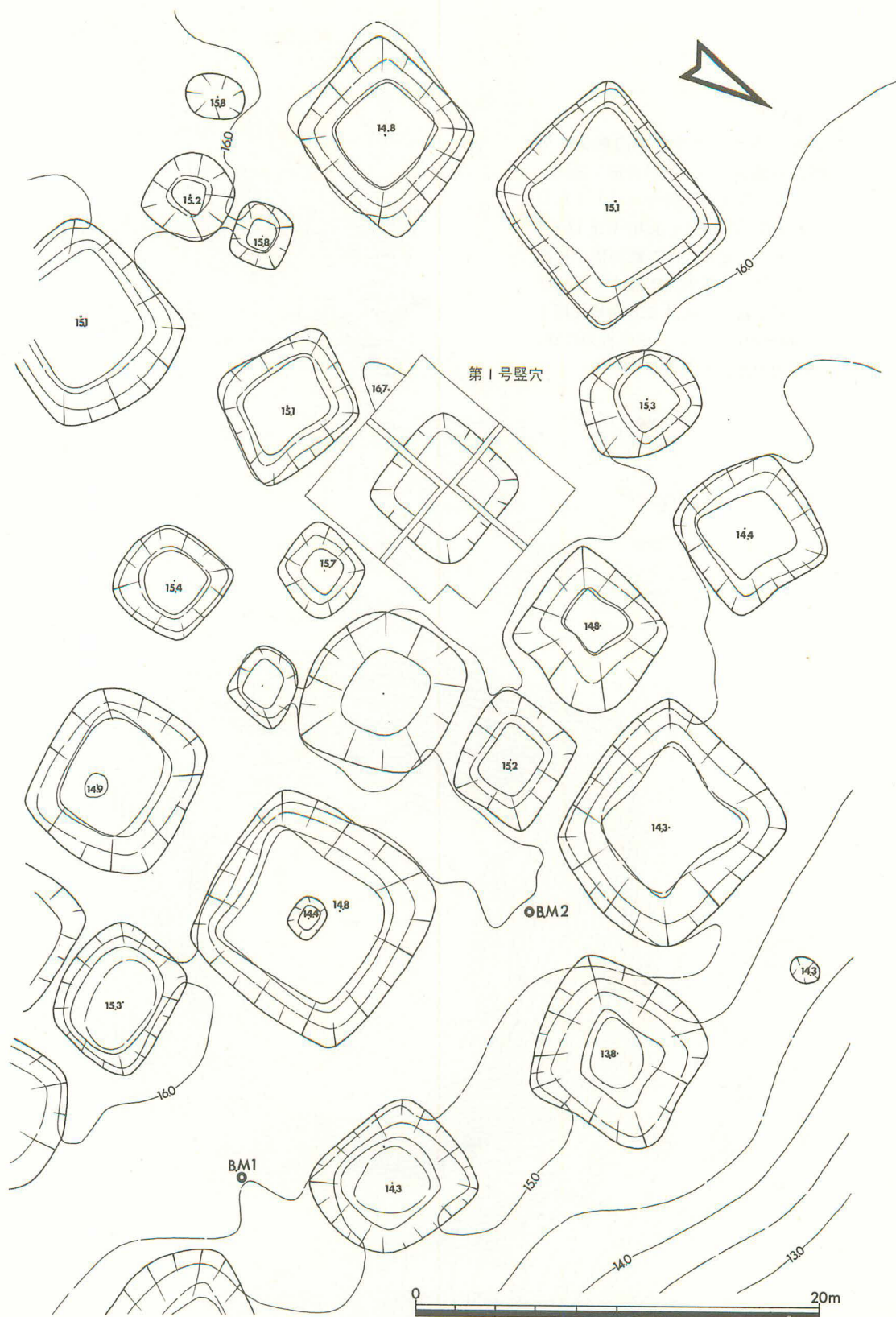
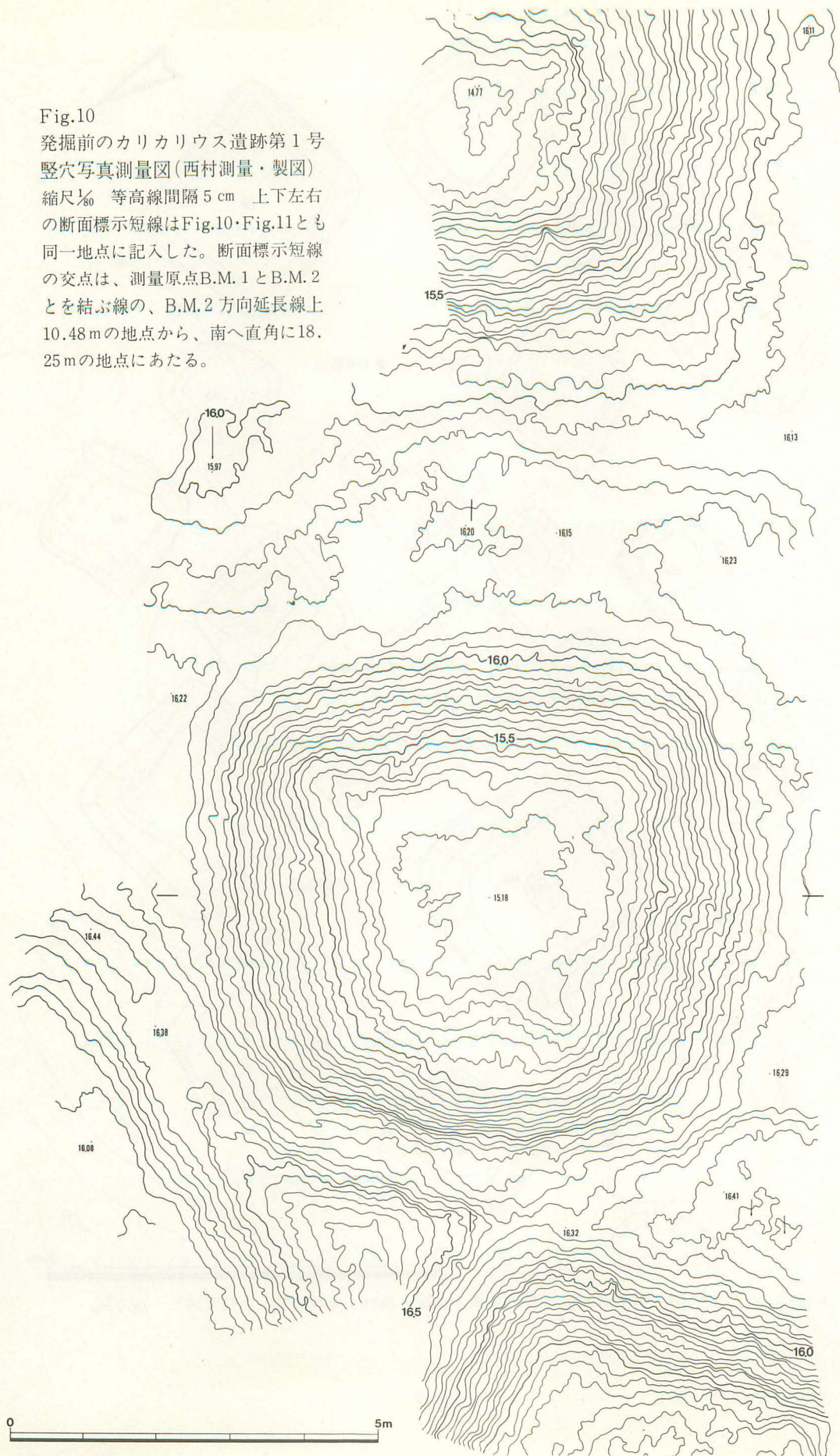



Fig. 9　カリカリウス遺跡の竪穴群（岡本・南保・西村・涌坂測量　西村製図）　縮尺1/300

Fig.10
発掘前のカリカリウス遺跡第１号竪穴写真測量図（西村測量・製図）縮尺1/80　等高線間隔５cm　上下左右の断面標示短線はFig.10・Fig.11とも同一地点に記入した。断面標示短線の交点は、測量原点B.M.１とB.M.２とを結ぶ線の、B.M.２方向延長線上10.48ｍの地点から、南へ直角に18.25ｍの地点にあたる。

みられるカヤ状の炭化物が多量に出土し、この住居跡が焼失したことを物語っている。四方の壁際には径10cmほどの柱穴が16あり、西半部にも小ピットが点散するが柱穴とかどうかは判らない。擦紋土器の南１ｍのピットは埋土中に骨の細片を含んでいた。他にも骨片を含んだ火山灰が西南隔で検出されている。南壁際には径80cmほどの不整形のピットがあり、擦紋土器片が出土した。

竈は東壁を斜めに切ってつくった煙道部（幅20cm・現存の長さ1.5cm）と焼成部とからなっている。天井はすでに落ち込んでいたが、焚口付近は浜石を支柱として白灰色粘土で固めた側壁が残っていた。竈の下底面は焼けており、その焼土中には細い骨片が混入していた。

Fig.11　発掘後のカリカリウス遺跡第１遺跡第１号竪穴写真測量図　（西村測量・製図）
縮尺1/80　等高線間隔５cm　Fig.10説明参照。

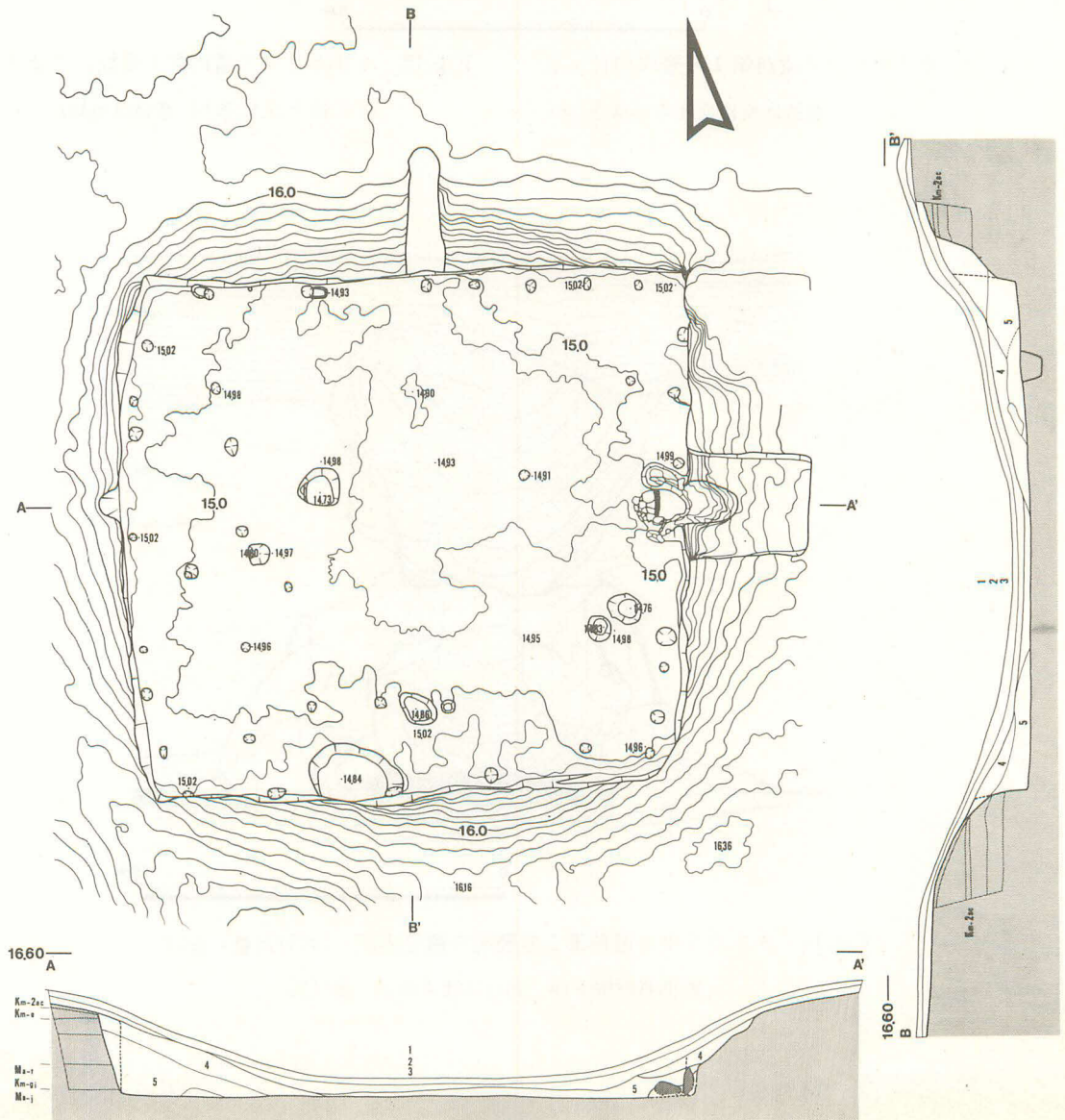
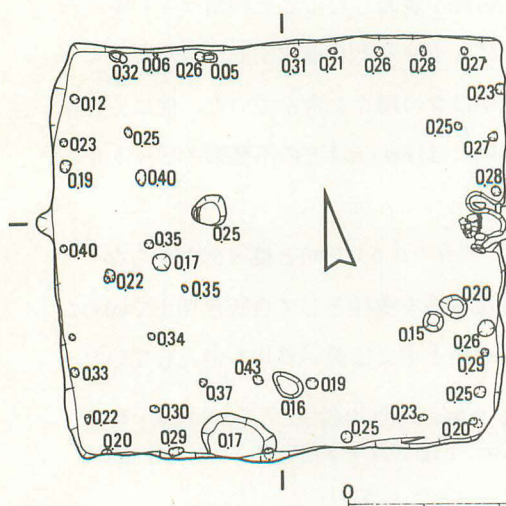



Fig.12　カリカリウス遺跡第１号竪穴のピット

数値は検出面からの深さ（m）

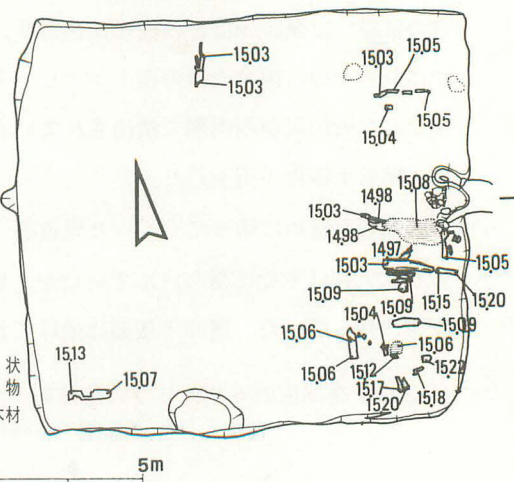



Fig.13　カリカリウス遺跡第１号竪穴の茅状炭化物と炭化木材　数値は海抜高（m）

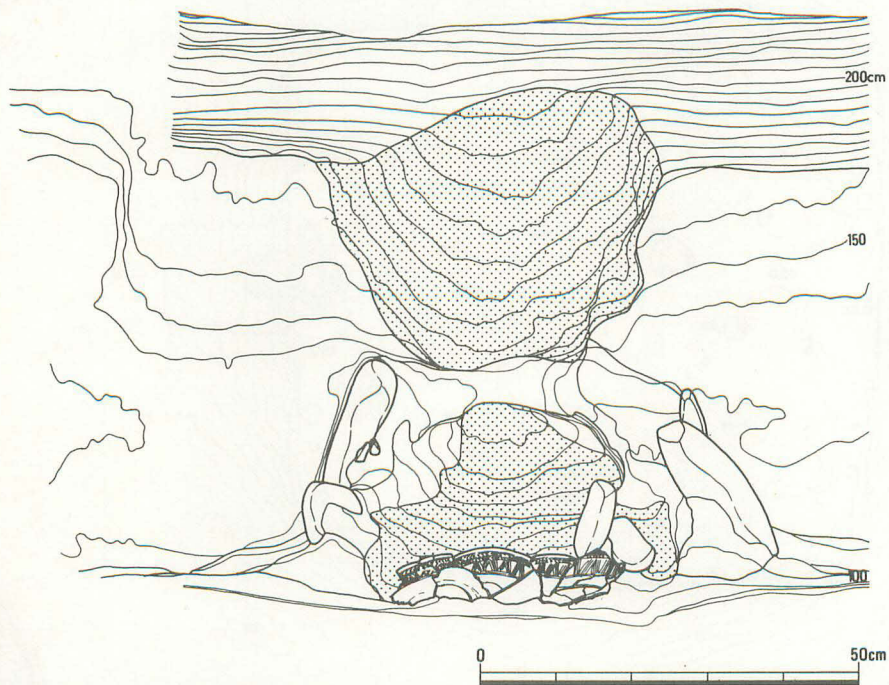



Fig.14　カリカリウス遺跡第１号竪穴の竈立面図　（西村測量・製図）

断面線間隔５cm　網点は煙道部分　縮尺1/10

## F　両遺跡に堆積する火山灰

北海道根釧農業試験場山口　宏氏をわずらわし、伊茶仁カリカリウス、伊茶仁チシネ第2遺跡の土層を判定していただき、下表に表示した各種火山灰の存在を確認した。

先に伊茶仁ふ化場遺跡でみとめられた矢臼別の火山灰は、いまのところ両遺跡においては確認するにいたっていない。

チシネ第2遺跡第1号竪立はおよびカリカリウス遺跡第1号竪穴は（Km-2a）によって覆われているが、チシネの第2号竪穴は、この火山灰を切って作っている。
伊茶仁カリカリウス・チシネ第2遺跡にみられる火山灰を次に列筆する（岡本)。

この説明およびFig.15は、北海道火山灰命名委員会　釧路、根室、網走支庁管内火山分布図1972による

| | | |
|---|---|---|
| 雌　阿　寒 | Me-a | 灰白色の細粒火山灰 |
| カムイヌプリ | Km-2a | 灰褐色の細粒火山灰 |
| | Km-e | 暗灰褐色の火山灰。偏平な熔岩礫（2～5㎜）をふくむ。 |
| (矢臼別 | | 茶褐色　伊茶仁ふ化場遺跡で確認) |
| カムイヌプリ | Km1f | 橙色の降下軽石。軽石は多孔質、腐朽して脆い。 |
| 摩　　　周 | Ma-f | 灰色の火山灰、発泡の良くない軽石礫に富む。 |
| | Ma-g･h･i | 黄灰色の火山灰。 |
| | Ma-j | 黄灰色の軽石砂・灰青色の熔岩砂。 |

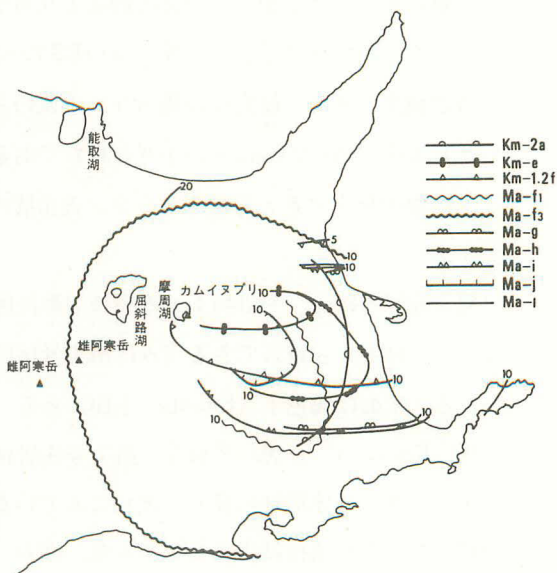
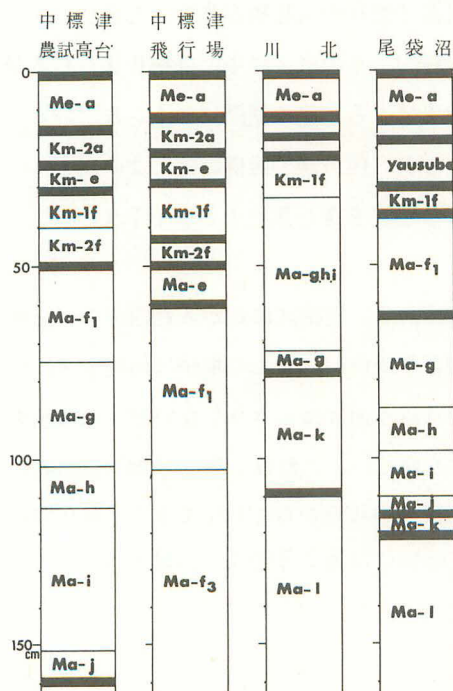



Fig.15　標津付近の火山灰

分布をしめす線に付けた数字は火山灰層の厚さ

## G　伊茶仁チシネ第2遺跡の竪穴

伊茶仁チシネ第2遺跡の竪穴は、約150基数えられている。今回は、ニレ・ナラ・トドマツ・ハンなどの林の立木を写真測量の支柱に利用する方針をとったため、最も適当な状況下にある1竪穴を発掘対象としてえらんだ。

この竪穴、すなわち第1号竪穴は、チシネ第2遺跡の竪穴群のなかで東端にある約20軒からなる1群にぞくしており、その中にあっては最も西に位置している。

第1号竪穴住居跡（PL.1－1、PL.6～7、Fig.17～19）は長軸7.8m・短軸5.0mの長方形住居跡であって、発掘前、周囲の地面から深さは約65cm、周りに残る土手の高さは約50cmであった。

住居跡内の覆土は中央部に薄く壁際に厚く皿状に堆積している。

覆土は3層に分かれる。第1層は草根を含む腐植土、第2層は白灰色火山灰（Me-a）混り暗褐土、第3層はオレンジ火山灰（Ma-ghi）のブロックを含む黒色土である。床面はオレンジ火山灰（Ma-ghi）層中にあり、一部下層の白灰色火山灰（Ma-J）があらわれている。

住居跡の切り込み面は灰黒色火山灰（Km-2a～c）層下からつくられる。床面までの深さは約40cmである。

覆土中には続縄紋後北$C_2$式を含む若干の遺物と多量の自然石が出土した。床面からは住居跡の時期を決める擦紋土器（PL.7－2、Fig.26－1）一個体が出土した。

炉跡は検出できなかったが住居跡北よりの中央部で骨片や炭化物が集中した部分があった。また、西南隅にピット（径30cm・深さ42cm）があり、その埋土の中には細片化した多量の骨が検出できた。柱穴は10個あり、1個のみ中央によるが他は壁際につくられている。いずれも径10cm～20cmほどの小さな柱穴である。なお、住居跡の西側には、この住居をつくった際の排土と考えられるオレンジ火山灰のブロックを含む黒色土が、土手状にのこっていた。

第2号竪穴跡は、一辺約4mの小型方形住居跡である。発掘区にかかる約四分の一を発掘した。地表から観察できる窪みは第1号住居跡より浅いが、覆土の堆積は同様3層に分かれる。床面は褐色土（Km-1fa）上面にある。切り込み面ははっきりしないが、灰黒色火山灰（Km-2a～c）を切っており、第1号住居跡より新しい。これは、第2号竪穴住居跡の排土が、第1号住居跡の窪みに流れこんでいる発掘前の状況からも判定できる。住居跡の時期を決定する遺物は出土しなかった。なお、Fig.18には第2号竪穴住居跡を図化してはいない。（岡本）

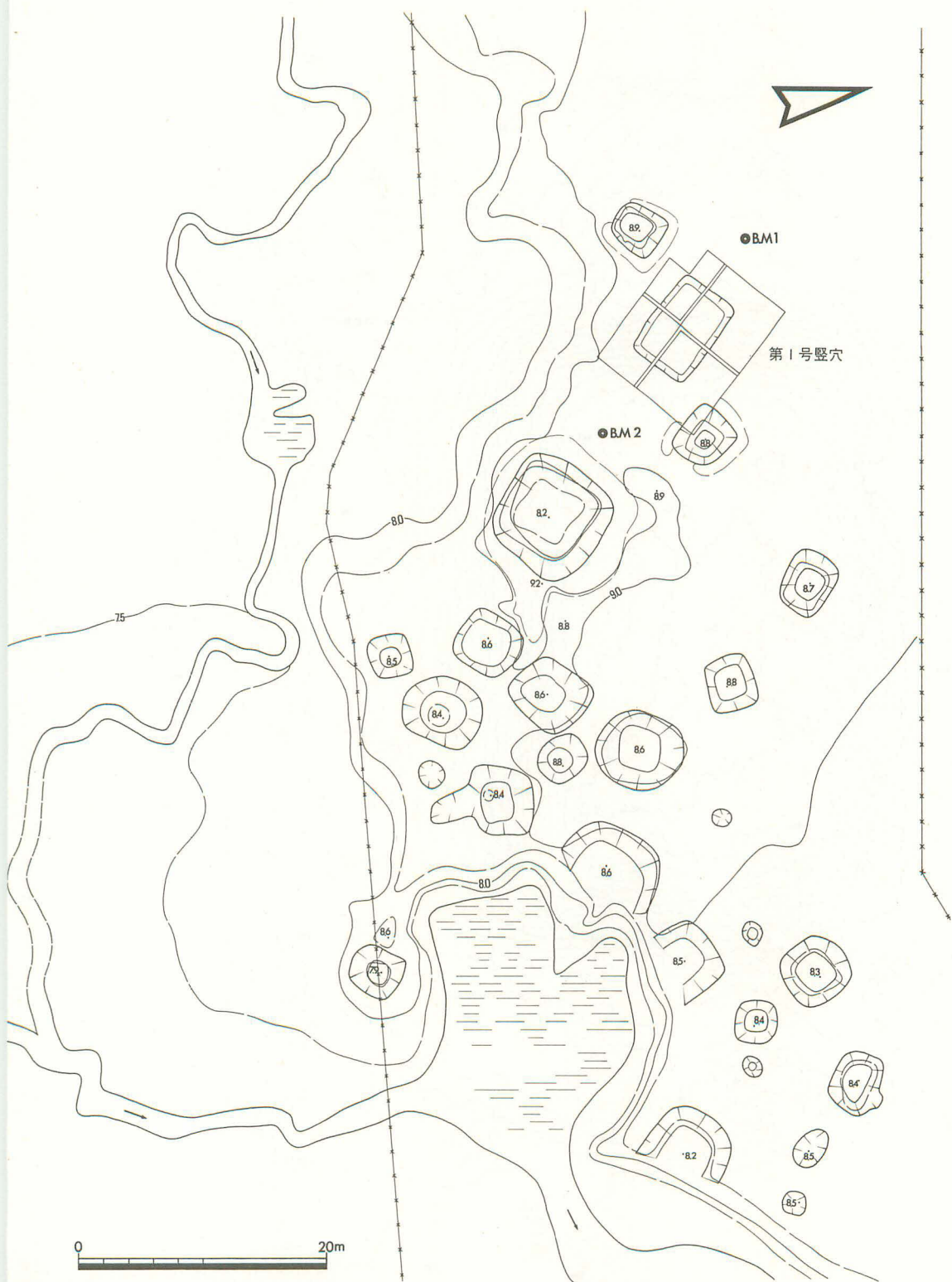



Fig.16　チシネ第2遺跡の竪穴群
（豊原・西・西村・福士・福田一輝・山本・涌坂測量　西村製図）　縮尺1/500

9.40
9.38
9.17
9.5
9.42
9.0
9.5
9.56
8.63
9.48
8.42
9.02
9.06
9.43
8.5
9.03
8.52
9.11
9.22
9.0
9.28
9.22
9.0
9.0
0
5m
9.06
9.09

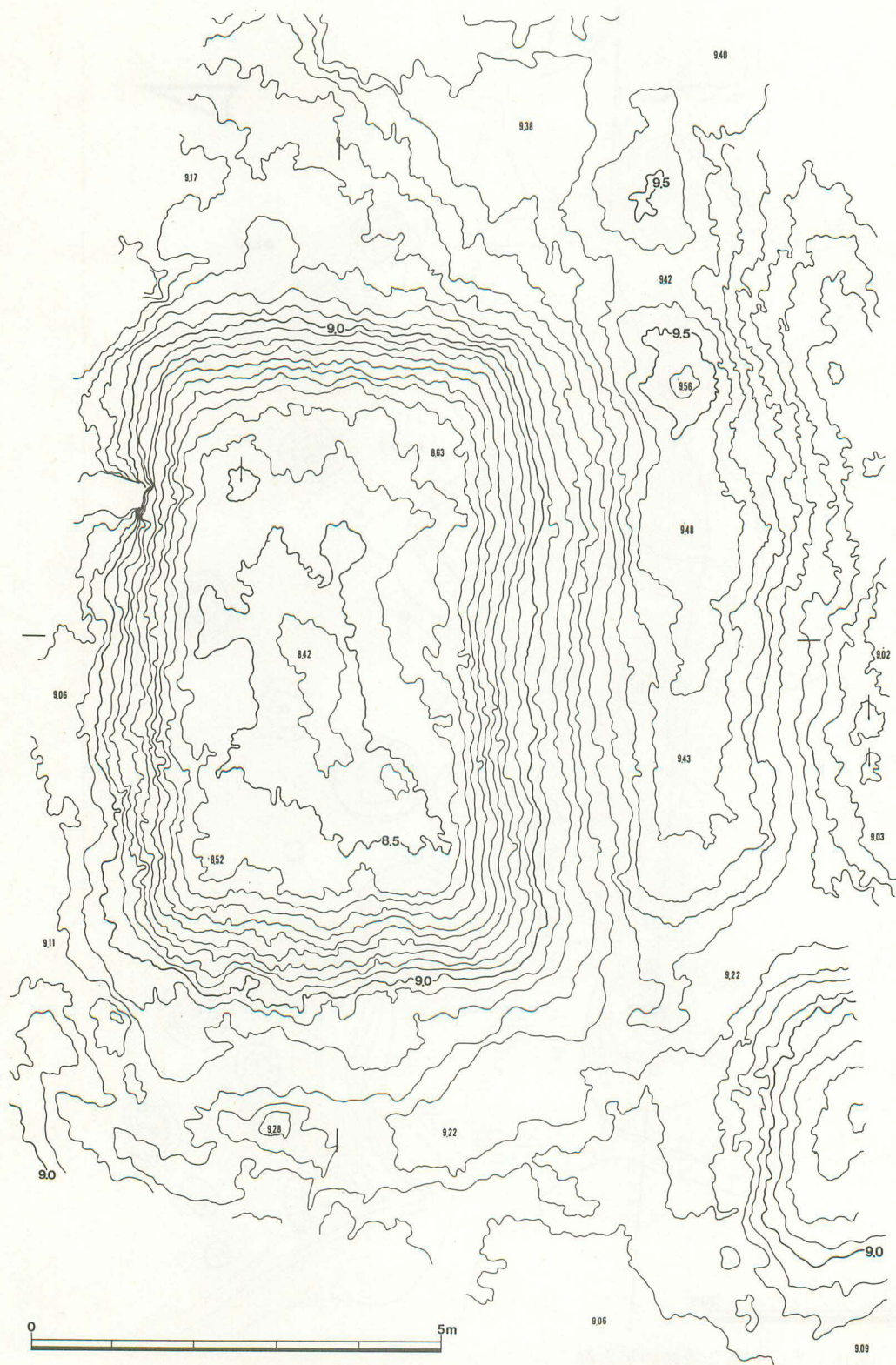



Fig. 17・18　発掘前・後のチシネ第2遺跡第1号竪穴写真測量図（西村測量・製図）縮尺1/80
等高線間隔5 cm　上下左右の断面標示短線は両図とも同一地点に記入。断面標示短線の交点から上方延長線上8,495 mの位置に測量原点B.M.1がある。

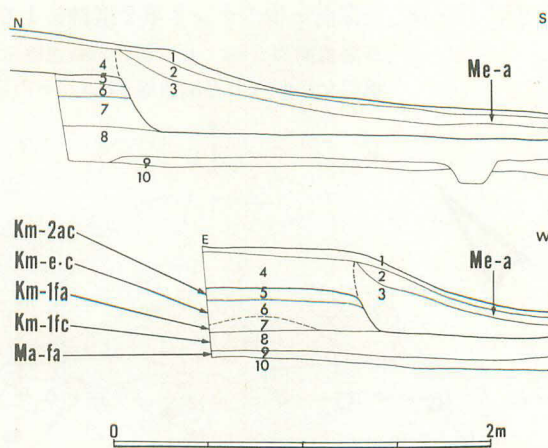
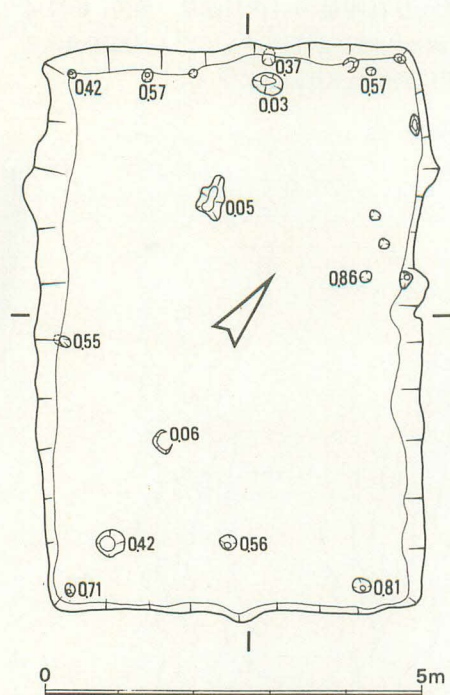



Fig.20　チシネ第２遺跡第２号竪穴の断面
（椙田・佐原実測、西村製図）縮尺1/40
上）南北壁西面・下）東西壁西面
４黒色土　５オレンジ色パミス混り盛土
６黒灰色火山灰　７黒色土　８褐色土
９黒色土　10オレンジ色火山灰

Fig.19　チシネ第２遺跡第１号竪穴のピット
数値は検出面からの深さ（m）

Fig.21　チシネ第２遺跡第１号竪穴と
撮影・写真測量用ポールに使った立木
B.M.２は下方延長線上10.40ｍの位置

# II 遺　　物

## A　伊茶仁カリカリウス遺跡の遺物

伊茶仁カリカリウス遺跡第1号竪穴住居跡にともなう遺物は、擦紋土器と繊維製品のみである。しかし、竪穴住居跡の覆土と付近の表土層とから土器片・石器類若干が出土し、本集落遺跡の年代の幅の大要を知ることができた。

土　　器（PL.8・9、Fig.23－24）

a 擦紋土器　　竪穴住居跡東壁に作りつけた竈の焚口の前に倒れた状態で深鉢1個(1)が出土した。このほか、南壁に接したピット内からも、深鉢の破片(2)が出土し、また高杯破片（3～5）が覆土から出土した。この竪穴住居に層する土器と考える。

竈の焚口前面から出土した深鉢(1)は、高さ25.6cm、口径24.5cm、底径6cm、黒褐色、焼きは硬い。

破片になってみいだされたけれども、われかたなどから成形の過程をうかがうことは出来ない。底面には砂粒の痕跡が目だっている。製作に使った下敷から離れやすいように砂をもちいたのか、地面上で直接作ったためか。

強く斜め上方向にのびる口縁部外面には、横方向になでてかすかに4凹線を引き、線の間に列点4列を加えている。列点は斜方向をとり、列毎に傾斜を変えている。

頸部以下には、ヘラ描き斜線6～8本によってジグザグ線を形成し、これによって生じた三角形の空間の斜縁を列点をもって縁どっている。三角形左斜辺ぞいの列点は右上り左下り、右斜辺ぞいの列点は右上り右下りとするのが原則である。しかし、左・右両斜辺ぞい共に右上り左下りの列点を加えた個所もある。

ジグザグ紋・列点紋の下縁は、ヘラ描き直線的4条によって縁どっている。

器面外面は底部から、紋様帯にいたる範囲を縦方向にヘラ磨きしている。しかし紋様帯の部分は磨かないままである。

器面内面は底部から頸部近くまで縦方向に、ていねいに磨き、口縁部および頸部は横方向に磨いている。

ピットから出土した擦紋土器深鉢の口縁部破片は横方向になでて浅い凹線を2条ひき、それぞれの下および、頸部への移行部分に列点を加えている。列点は斜方向をとり、その傾斜を列ごとに変えている。頸部以下の紋擦の全貌はわからない。しかし7～10本のヘラ描き線を引き、やや間隔をおいてこれを反復するものらしい。補修孔がある。

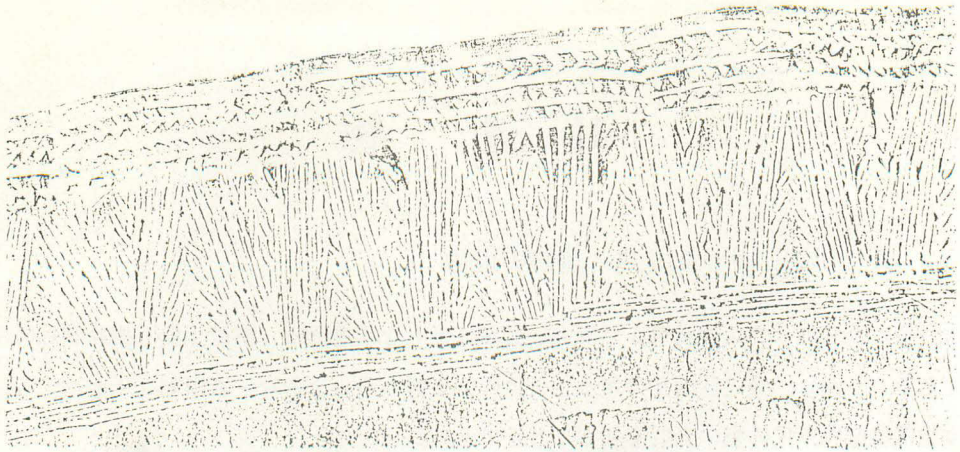



Fig.22　カリカリウス遺跡出土土器(1) 擦紋土器拓影

高杯脚部は3個体分あり、その1例(3)は刻目突帯2条をめぐらし、もう1例は凹線2条をめぐらしている。

上記の擦紋土器は、擦紋土器としては新しい段階にぞくするものであって、石附喜三男氏のⅥ式、大井晴男氏の3式、菊池徹夫氏のD式、佐藤達夫氏のⅣ－6式、藤本　強氏のｉ式に相当するものだろう。

ｂオホーツク式土器　　オホーツク式に特徴的なソーメン状浮紋をもつ破片2個をみいだした。黝黒色の硬く緻密な土器で、1例(7)には竹管紋の一端がみえる。

ｃ縄紋土器　　細片ながら、早期から晩期にわたる縄紋土器がみいだされている。

1.絡条帯圧痕紋土器（Fig.24・1・2）口縁部外面に絡条帯圧痕紋を斜・水平に加えた土器である。厚手の1例は、外面全面と、上端5cmの範囲を除く内面とに、横・斜方向に2枚貝条痕をほどこしている。もう1例の絡条帯圧痕紋はひじょうに繊細である。これらは、浦幌式に相当するものであろう。

2.刺突紋・縄紋土器（10）　　角張った口縁部をそなえ、刺突紋2帯の下に縄紋をほどこしている。平底をそなえる早期末（東釧路Ⅲ式）の土器であろう。

3.厚手斜縄紋土器（3～7）　横位の単節斜縄紋ＬＲ（3・4・6）、ＲＬ（5）、横位の無節斜縄紋Ｒ（7）をもつ厚手の土器である。3は突起を作り、上端面に刻目紋、外端面に点列をめぐらし、口縁下に円形竹管紋を加えている。中期（常呂6類）にぞくするだろう。

4.薄手斜縄紋土器（8・9）　平面形が隅円方形を呈するらしい。口縁部外端に刻目、上端面および内面上端にそれぞれ撚糸Ｌ圧痕紋を加えている。縄紋は単節RL（0段多条か）を方向を変えてもちいる。ノサマイ式に属する。

編　　物（PL.5－2）

竪穴の東北区の壁ぞいに繊維製品を検出した。現在、樹脂加工を進行中であって、終了後精査する予定である。藤本英夫氏の教示によるとアイヌの袋（サラニプ）に酷似する（佐原）。

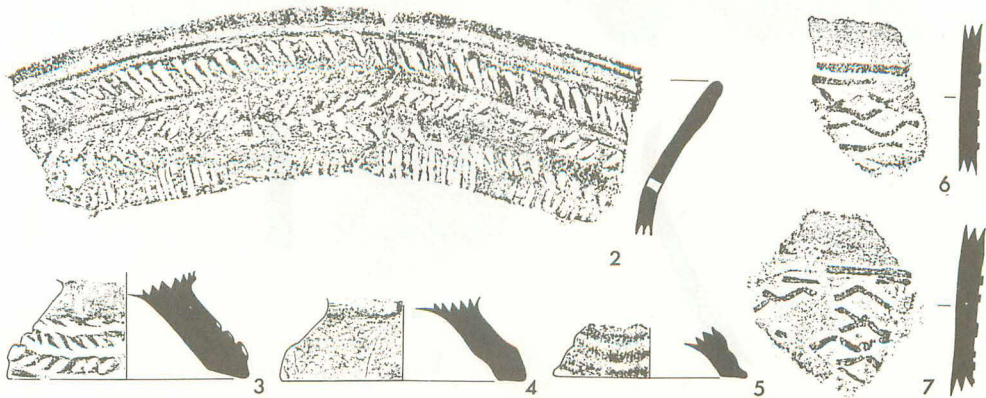
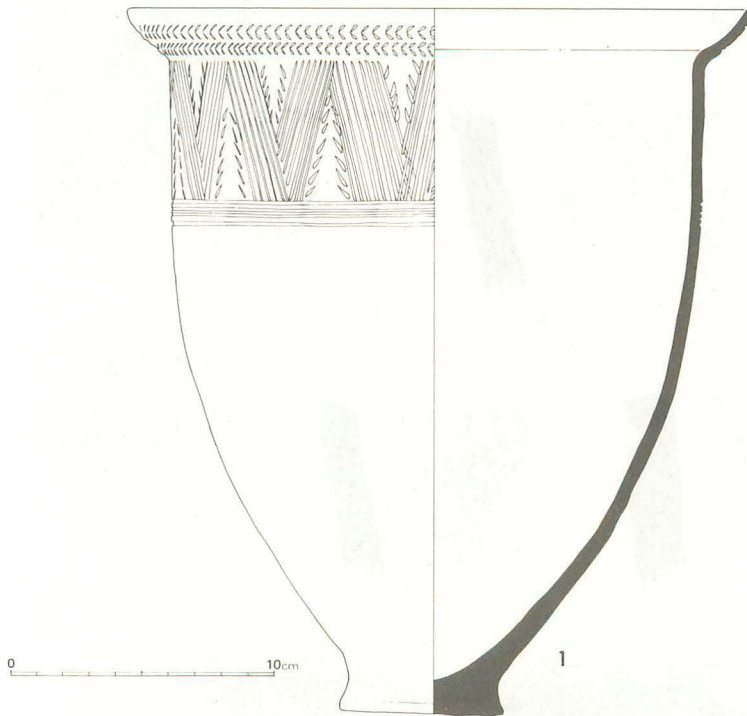
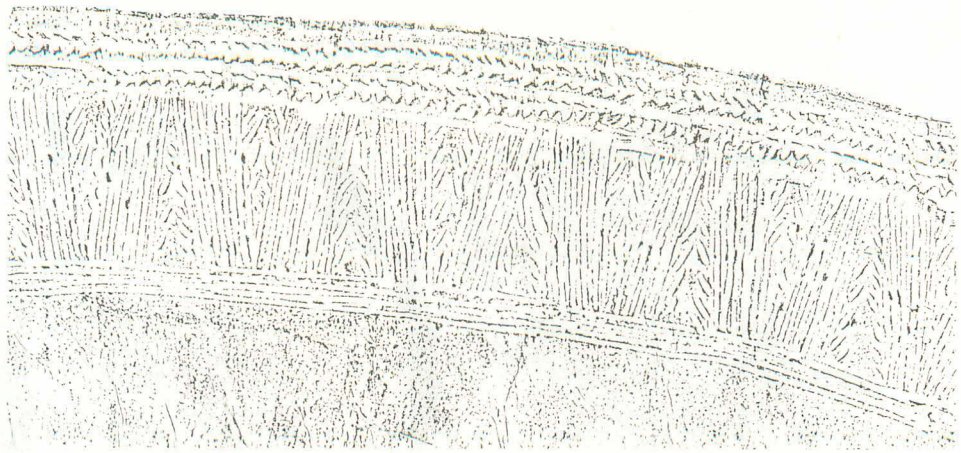



Fig.23　カリカリウス遺跡出土土器(2) 擦紋土器・オホーツク式土器（吉田実測・製図）

1　縮尺⅓　2～7　縮尺½

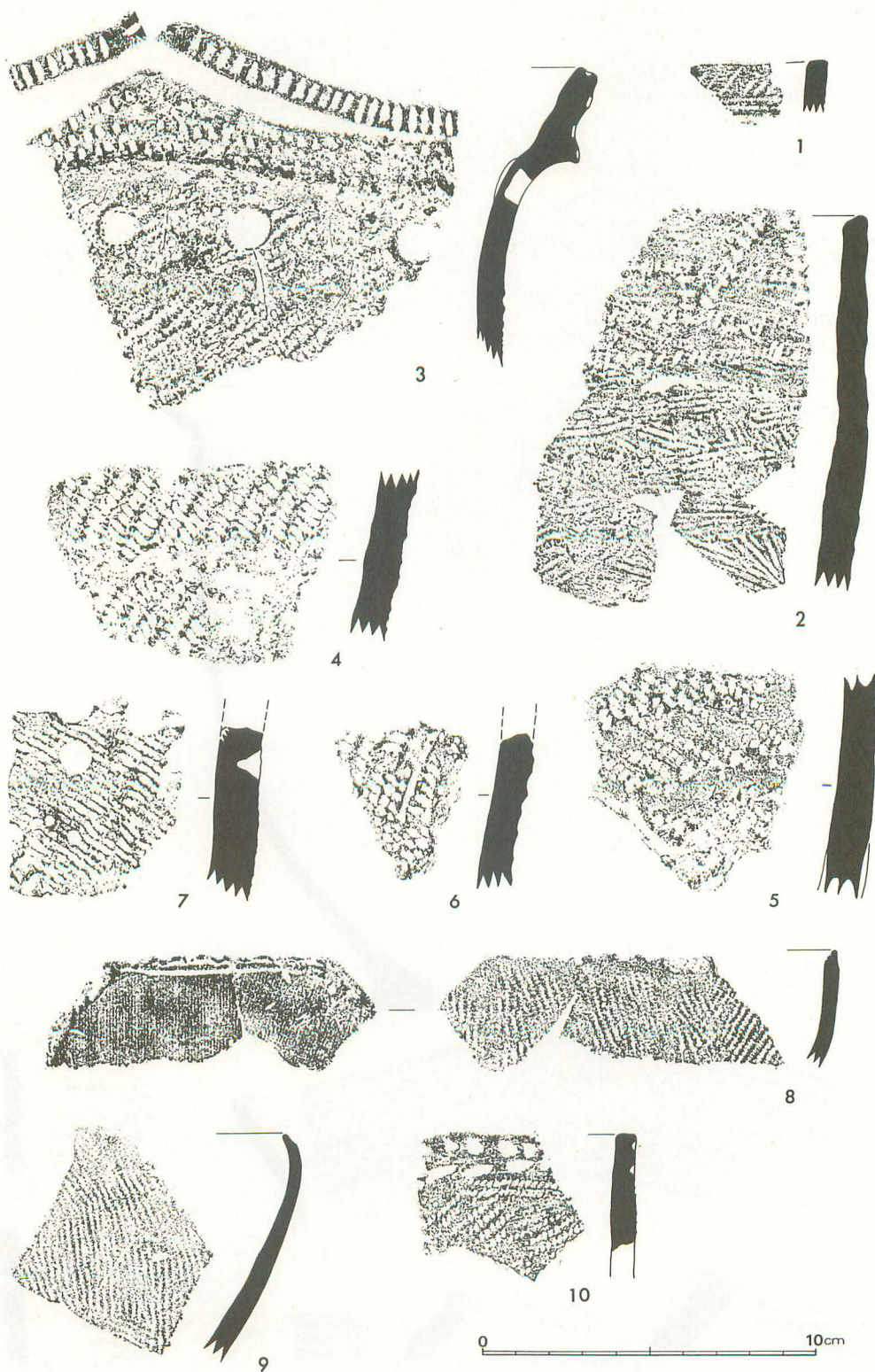



Fig.24　カリカリウス遺跡出土土器(3)縄紋土器（吉田実測・製図）　縮尺1/2

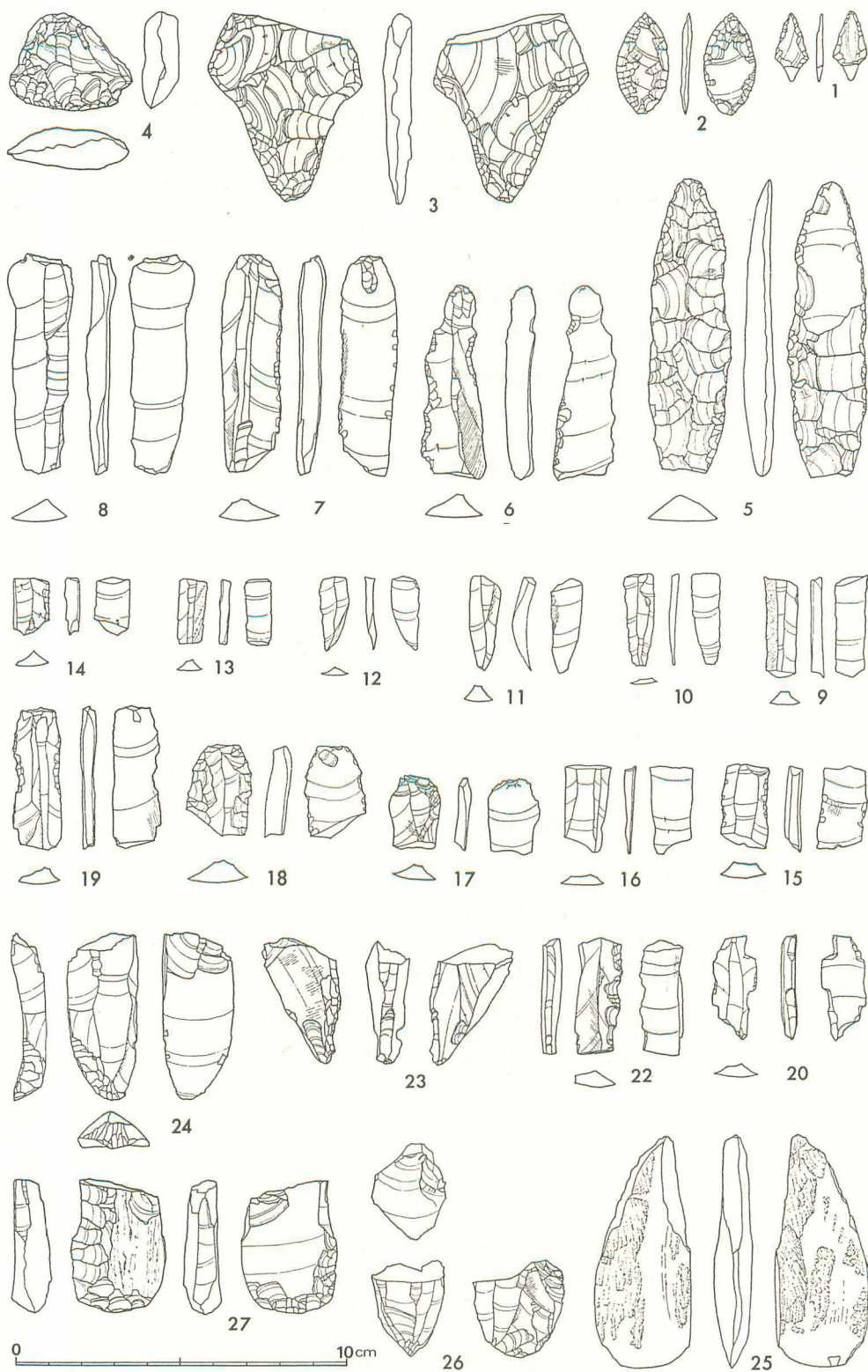



Fig.25 カリカリウス遺跡出土石器（椙田実測・製図） 縮尺½

b石　　器（PL.10、Fig.25）

黒曜石製の打製石器・石屑182点と、粘板岩製かとみられる磨製石斧１点とがある。

１・２は石鏃である。１は茎を欠く。両面に１次剥離の面を残し、調整は縁辺に限られる。４は厚手の剝片を利用した両面加工のスクレーパー。６は石刃状の剝片を素材とし、１端近くの両側にえぐりをいれ、つまみ状にしあげている。縁辺には細かな剝離があるが、加工痕かスクレーパーとしての使用痕かはわからない。５は、尖頭器状のスクレーパーである。調整は、主要剝離面（腹面）では一部に、背面では全面におよんでいる。主要剝離面側は全体に磨滅している。３は先端部をうしなった尖頭器で、茎から身にうつる部分の縁辺は磨耗している。

７～22は石刃である。石刃の縁辺の線、背面にのこる稜はまっすぐ通ること、石刃を側方から見ると大きな弯曲がないこと、、そして、剝離角が大きくて90度に近いこと、バルブがひじょうに大きいこと等々を特徴としてあげることができる。早期縄紋土器（１・２）の石刃鏃文化にぞくするものであろう。

23・26は剝片をスクレーパーとして使用後、縁辺をおとすように彫刻刀面をいれている。26には一端に加工があり使用のあとがある。27にも彫刻刀面がある。彫器か。24はエンドスクレーパー。主要剝離面と刃先とのなす角度は約50度である。29は彫刻刀削片。28・30～32は石屑。26は石核。上下両方向から剝離しているが、打面の１つはなくなっている。25は磨製石斧。磨研は不完全。側面を作りだしている。片刃。アッズ（横斧）。（椙田）

## B　伊茶仁チシネ第２遺跡の遺物

伊茶仁チシネ第１号竪穴住居跡にともなう遺物は、擦文土器１個体分のみである。しかし、竪穴住居跡の覆土および周辺の表土層から若干の土器片・石器類が出土し、また平板測量に際しても表面採集によって石器を得たことによって、本竪穴群の年代の幅のおおよをつかむことができた。

土　　器（PL.11・12、Fig.26・27）

a擦文土器　　（PL.11、Fig.26・１、Fig.27）第１号竪穴の床面上に、つぶれた状況でみいだした。竪穴の年代をしめす土器である。胎土は粗質、砂をふくみ、外面は褐色、内面は黒褐色で、芯は黒い。軟質である。高さ15cm、口径17.4cm、底径2.6cm。

この土器は、粘土帯を積みあげて作っている。各粘土帯の上の端には、指先で内に高く外に低い斜面（幅１～1.5cm）を形成しており、次に重ねる粘土帯との接着を強固にすることをはかっている。土器がこわれる際に、この合わせ目の部分でわれ、粘土帯上端の加工

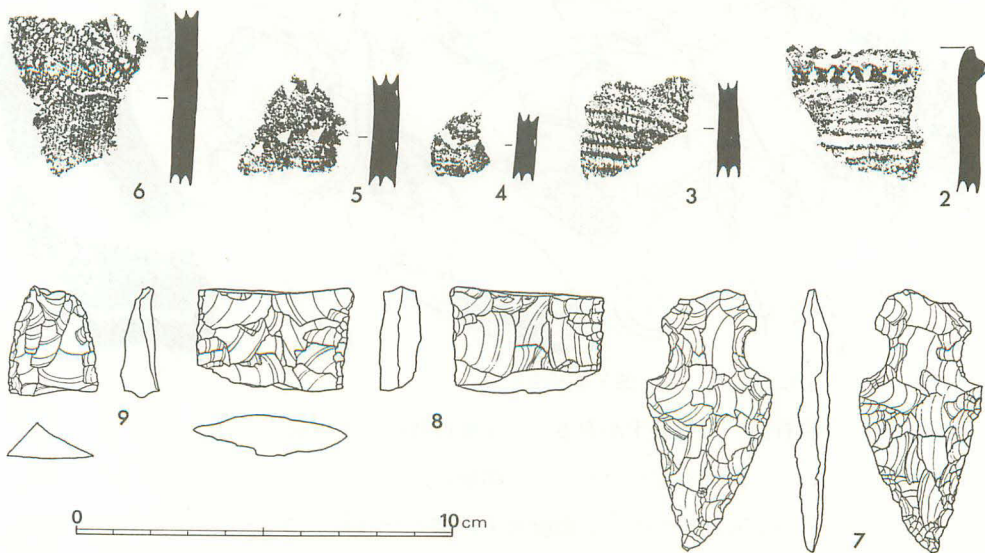
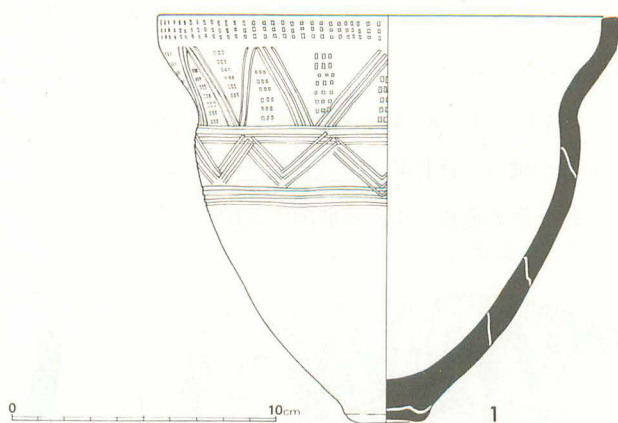
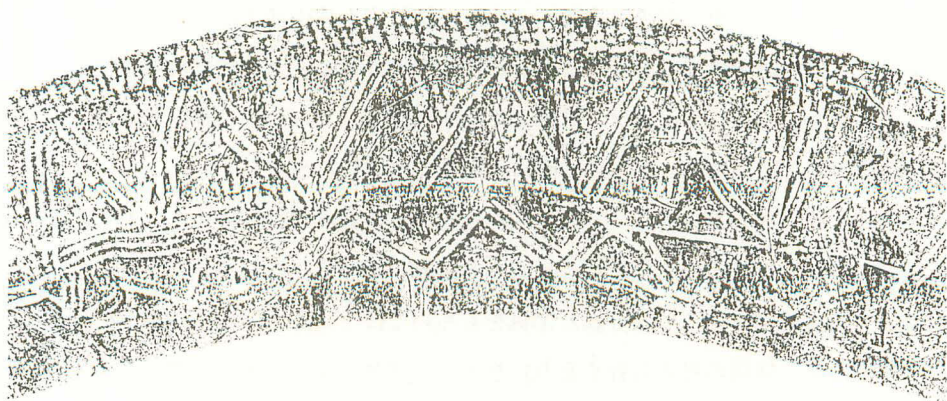



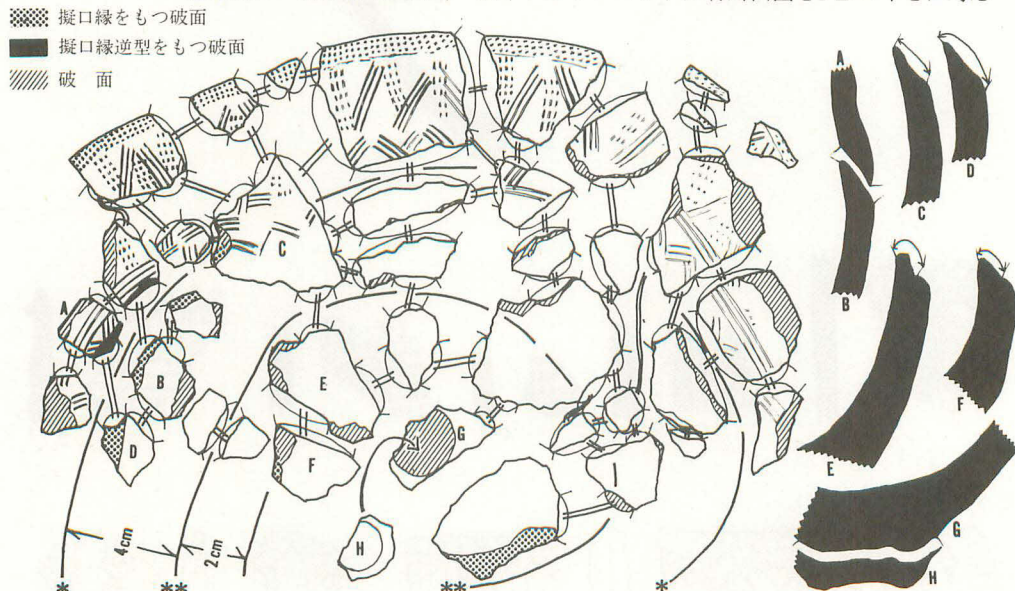
Fig.26　チシネ第２遺跡出土土器・石器（土器吉田、石器椙田実測製図）
1　縮尺⅓　2～9　縮尺½

部分が露呈することになったのである。この種の粘土帯上端の加工は、一見、口縁部と似ているので、擬口縁とよんでおり、その存在の仕方によって、土器成形の順序を知ることができる。すなわち、この土器は、底部側から作り始め、しだいに口縁部側におよんでいる。擬口縁は3個所に残り、粘土帯の幅は、本来2cm前後だったらしい。

底部の作りは特異であって、いったん作った内凹みの底面の周囲に小さなかすかなくぼみを数個つけたのち、新に円板を加えて底面を完成している。底は小さく不安定である。

紋様は、先端が櫛状に3つに分れた工具をもちいてほどこしている。口縁部には横の列点紋、頸部には、傾斜の異る斜線を交互に加えたジグザグ文と、その空隙をうめる縦の列点紋とをほどこし、頸部下端に水平方向の直線紋を描いている。その下には、ふたたびジグザグ紋を加え、さらにその下に水平方向の直線紋をもって下限を画するが、この直線紋は、全周をめぐるものではないらしい。

b 続縄紋土器　　(PL.12、Fig.26・2～6) 刻みを加えた口縁部の直下に刻み目突帯をめぐらし、その下に横走縄紋をもつ破片 (後北Ⅲc式) 三角形の点刻紋をもつ破片などがある。

Fig.27　チシネ第2遺跡出土土器展開模式図　　(佐原)
縮尺約1/4 (佐原作成製図) 図中アルファベットは右断面図とPL.11下とに対応

2．石　　器 (PL.12・2、Fig.26・7～9)

黒曜石製の打製石器・石屑若干がある。9は縦長剥片。使用痕がある。8は両面加工の尖頭器様石器の破片。15は不定形の剥片。不調整打面をもつサイド=スクレーパーの1種。

7はいわゆる「つまみ付きナイフ」。両面加工を加えたのち、錯交によって刃部に刃潰し近い調整を加えている。14スクレーパー。13石屑。(椙田)

# III　竪穴群の測量

本調査は期間が限られていたため、われわれは短時間内に能率よく、かつ精度が保たれる測量器材を選んだ。地形測量では、平板図根点間の測距に光波測距儀と１秒読みセオドライトを使用し、細部測量には写真測量を応用した。

今回使用した光波測距儀は、ウイルド社製ディストマットDI3で1.2kmまでの距離が±５mmの精度で測れる。これは測量原点を国家座標に合致させるため、基準点測量を目的に選んだものである。しかし実際には、三角点が遠いことから、基準点測量に要するだけの時間がさけず、将来の懸案として残さざるをえなかった。調査した両遺跡には、それぞれ各２点づつコンクリート杭を埋めたが、これは後日、国家座標に結ぶ際の基準点となるものである。また今回の調査における原点でもあった（Fig.９・16にB.M.１、B.M.２と表示)。

上に述べたように、平面の測量はローカルなものとなったが、標高は海抜高によった。カリカリウス遺跡は北海道開発庁縦断用測量杭B.M.３（2.726）より、またチシネ第２遺跡は、一等水準点の準基182（15.58）より移した。水準点から海抜高を求める作業には、オートレベルを使用したため、往復の出合差は、10mm±$\sqrt{S}$kmであればよいことにした。

## A　地形測量

調査した両遺跡とも、発掘を実施した竪穴を中心に、付近の地形測量を実施した。縮尺は、両者とも1/200　である。これは、すでに1/6000の遺跡分布図があり[注1]、竪穴相互の位置関係を知ることができるため、今回はできるだけ大縮尺の地形図を作成して、発掘した竪穴のおかれている環境を知る目的で決めた縮尺である。

**カリカリウス遺跡**　発掘した竪穴は、丘陵先端部に近い部分にあたるため、この丘陵全体を測量する目的で、５点の図根点を設け、閉合トラバースを組んだ。測量に先だって、あらかじめ下草を刈ったため、見とおしは良く作業は容易であった。測量結果は、丘陵全域をカバーできなかったため、不満な点が多いが、次のような点が注目された。まず、丘陵頂部にあたる平坦面では、現状における竪穴床面の標高が海抜15ｍ付近の高さにあり、これを手がかりに考えると、竪穴はいくつかの群に類別できることである。しかし丘陵斜面に近い部分では、竪穴の位置は地形にそって低くなるため、この原則が絶対的なものではないことも推定できた。今後検討する必要があろう。

**チシネ第２遺跡**　ここでは下草が刈ってあったにもかかわらず、群生する大小の立木によって平板測量は困難な点が多かった。しかしこのなかで、従来知られていない竪穴を発見

することができた。これは今回の測量が縮尺の大きい地形図を目的にしたことと、下草が広範に刈られた結果と考えられる。また、竪穴床面の標高では、カリカリウス遺跡にみられたのと同様の結果がえられた。特にここの場合、実測した範囲では、床面は標高 8.5m 前後のものとそれ以外とに大別でき、明瞭な差のあることが認められた。これと竪穴の形態とを考えあわせれば、竪穴群を分類する有力な手段となると思われる。

## B 写真測量

写真測量は、作業が短時間で測定精度にむらがなく、フィルム（又は乾板）を保存する限り、必要に応じていつでも撮影時の状態が再現できるという利点がある。しかし通常の実測と異り、写真に写らない部分は図化できないという欠点がある。たとえば撮影時に遺構の清掃が十分でない場合には、細部が見えなかったり、深い穴の底が写らなかったりするのである。

写真測量の原理は、人間が両眼で異る位置から物体を見て遠近を知ったり、立体感をえていることを利用している。もし左右に適当な間隔をへだてて撮影した一組の写真を、右の眼で右の写真、左の眼で左の写真を見ることができれば、ちょうどカメラの位置に眼をおいて物体をながめているのと同じ状態になる。このような状態を機械的に再現するのが図化機である。図化機は実体視によって立体モデルをつくり、これを測定する。したがって、写真測量によって実測しようとする対象は、必ず異る二点から撮影されなければならない。今回の対象は竪穴であり、平面図を作成するのが目的であるから、空中から撮影する必要があった。

カメラを空中に保持する方法としては、航空機、バルーン、クレーンなど各種あるが、本調査では周囲に立木が沢山あったので、これを利用することにした。目標にした竪穴の両側に適当な立木を選び、この間にスチールワイヤーを張り、カメラをつり下げた。そのため撮影コースは限定され、異るコースを選ぶためには別の立木にロープを結びなおす必要があると考えた。しかし実際には、コースの直角方向からワイヤーを引くことによって、容易にコースを変更できることに気がついた。撮影高度は立木の高さに制限があるため、約６～７ｍであった。

今回使用したカメラは、ハッセルブラッドMK-70（F：61.1㎜）である。撮影高度が６～７ｍであるため、写真縮尺は約1/100 ほどとなる。短焦点レンズにもかかわらず、画面サイズが52×52㎜と狭く、実際に撮影できる範囲は５ｍ四方程度であった。撮影基線長と撮影範囲の確認には、モニターテレビを用いた。テレビカメラを測定用カメラと一緒につり下

げたのである。これには 100V の電源が必要なため、発電機を用意した。

今回は両遺跡とも発掘前(Fig.10・17) と発掘完了時(Fig.11・18) の写真測量を実施した。これに要した時間は、図化に必要な標定点の設置と計測とを含めて、1遺跡につき発掘前、発掘後各1日の合計4日である。

図化に使用した図化機は、ステレオメトログラフE型である。図化モデル数はカリカリウ・ス遺跡22、チシネ第2遺跡12の合計34で、図化に要した日数は延12日であった。図化に予想外の時間がかかったのは、モデル数が多いためである。今回のように計測の対象が竪穴で、等高線を主体とした図化の場合には、多少写真縮尺が小さくなっても、モデル数を少なくする工夫が必要なことがわかる。撮影高度を高くして、1枚の写真に広い範囲を写すのである。

図化縮尺は、カリカリウス遺跡のカマド部分の立面図を1/5とした以外、平面図はすべて1/20で、等高線間隔は5㎝である。図化の結果をみると、5㎝の等高線はあまりにも微細な地形をひろいすぎ、等高線の細かい変化が多くなって、わずらわしくみえる。この変化は、清掃の段階で、軟らかい地表面を踏みしめて生じた凹凸も表現している可能性があり、今後はこのような場合には、製図の前に校正したいと考えている。

しかしながら等高線による表現では、チシネ遺跡における竪穴東側の土堤状部分、すなわち竪穴内の排土のボリュームがよくわかる。また両遺跡の発掘前、後の図面を重ねあわせてみると、チシネ遺跡では南辺が、カリカリウス遺跡では北北西及び東北東辺が、堆積した土量が他より多いことがわかる。これは、当地方の風の方向ともかかわるものと推定されるのであって、竪穴の埋まっていった状況が推定できるであろう。

同様にカリカリウス遺跡におけるカマドの部分では、発掘前の図面を詳細にみると、その個所は等高線が変化していて、地表面からの観察でもカマドの存在が予測できそうである。分布調査などの際には、留意すべき点であろう。

なお、カリカウ遺跡のカマド立面図は、通常の投影法と同じ方法によって図化したものだが、一定の基準面からの奥行きを、間隔5㎝の垂直断面線(コンター)によって表現したものである。網目部分は木炭の散布している範囲すなわち煙道部分を示している。(西村)

注1、　東京教育大学作成　1974～5年

注2、　本書に掲載したFig1は、建設省国土地理院長の承認をえて、同院発行の5万分の1地形図を縮図複製したものである。(承認番号) 昭53道複、第344号

## 結　び

われわれが手がけた伊茶仁カリカリウス遺跡・伊茶仁チシネ第2遺跡は、いずれも大規模な竪穴群から成っている。ことに前者の規模は、全北海道的にみても最大級のものである。したがって竪穴住居跡を1軒ずつ発掘することによって、それぞれの性質を論じることは、もとより不可能なことである。

しかしながら、幸いにして両竪穴住居にぞくする土器を得ることができ、かつまた覆土・表土から若干の土器片・石器片を得たことによって、各遺跡の継続年代のおよそを知ることができる。

伊茶仁カリカリウス遺跡の第1号竪穴住居跡は、擦紋土器の新しい段階（石附喜三男氏のⅥ式、大井晴男氏の3式、菊池徹夫氏のD式、佐藤達夫氏のⅣ－6式、藤本　強氏のｉ式相当）にぞくしている。

同遺跡には、縄紋早期の石刃鏃文化の土器・石器がみられ、中期・晩期の土器も存在し、オホーツク式土器もみいだされている。

伊茶仁チシネ遺跡の第1号竪穴住居跡から出土した擦紋土器には、直ちに比較できる類例はない。しかし。擦紋土器としては古い位置を占める可能性もある。同遺跡においては続縄紋土器（後北IIc式）の存在がみとめられれ、同集落遺跡の継続年代にも幅があることを確認した。

火山灰によって土器の相対時代を決定する作業は、常路においてすでに試みられている。将来、同一火山灰の分布を手がかりに、遠い距離をおいた文化同士の相対年代を確認する作業を大きく推進できるであろう

始めて試みた竪穴調査における写真測量の効用の長短については、御批判を仰ぐことにしたい。

発掘調査と平行しておこなった平板測量によって、作成した竪穴の分布図は、下草がなかったという好条件と、採用した縮尺が大きかったこととによって、竪穴群の実体を従来よりもより鮮明にしたといえる。縮尺1/200ていどの平板測量を、両遺跡ともに全域におよぼすことが、竪穴群の調査・保存・活用のために急務であると考える。（佐原・西村・岡本・椙田）

＊なお10月29日に標津町で開催された広域遺跡保存対策研究会で、佐原は、火山灰の介在によって、チシネ第2遺跡第1号竪穴が古くカリカリウス遺跡第1号竪穴が新しいと報告したが、誤認だったので訂正したい。

### 主要参考文献

石附喜三男ほか『北海道標津郡標津町伊茶仁遺跡――B地点発掘報告書』1973年 標津町教育委員会

# 図　　版

1　伊茶仁チシネ第2遺跡第1号竪穴住居跡（北方より）

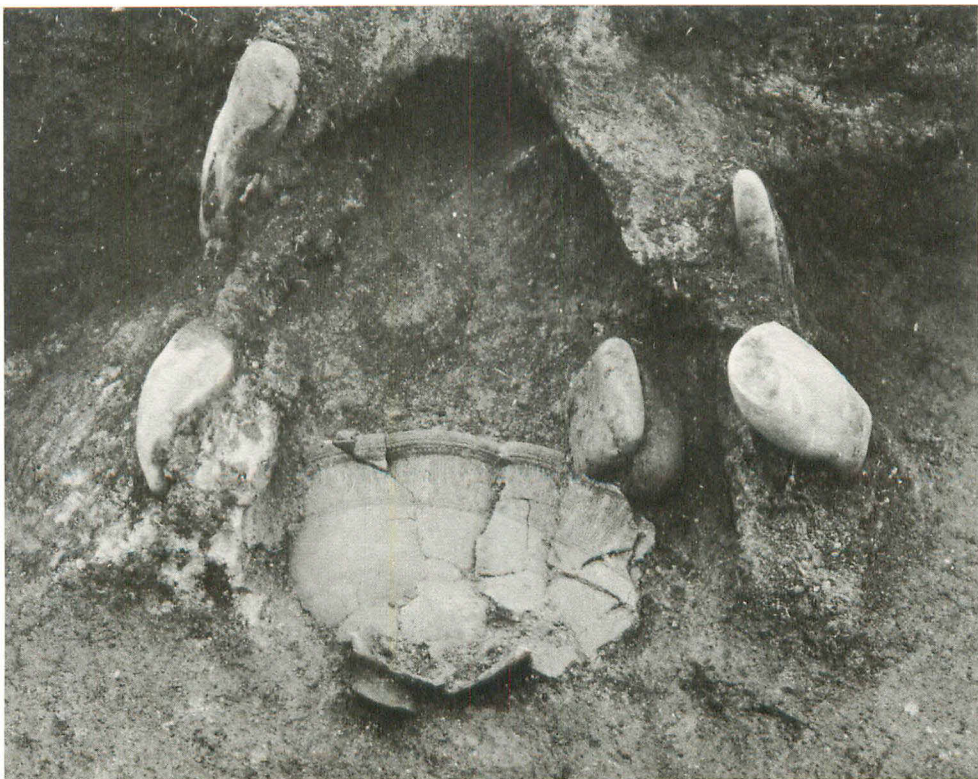
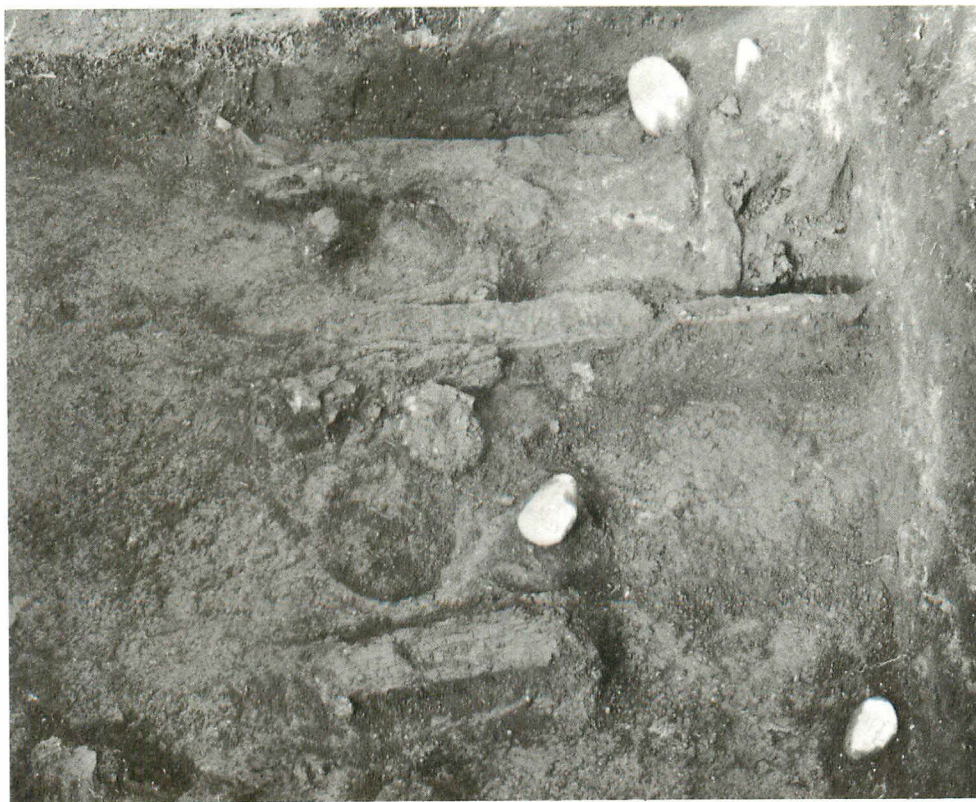
2　伊茶仁カリカリウス遺跡第1号竪穴住居跡（北方より）

1　発掘前の状況（南方より）

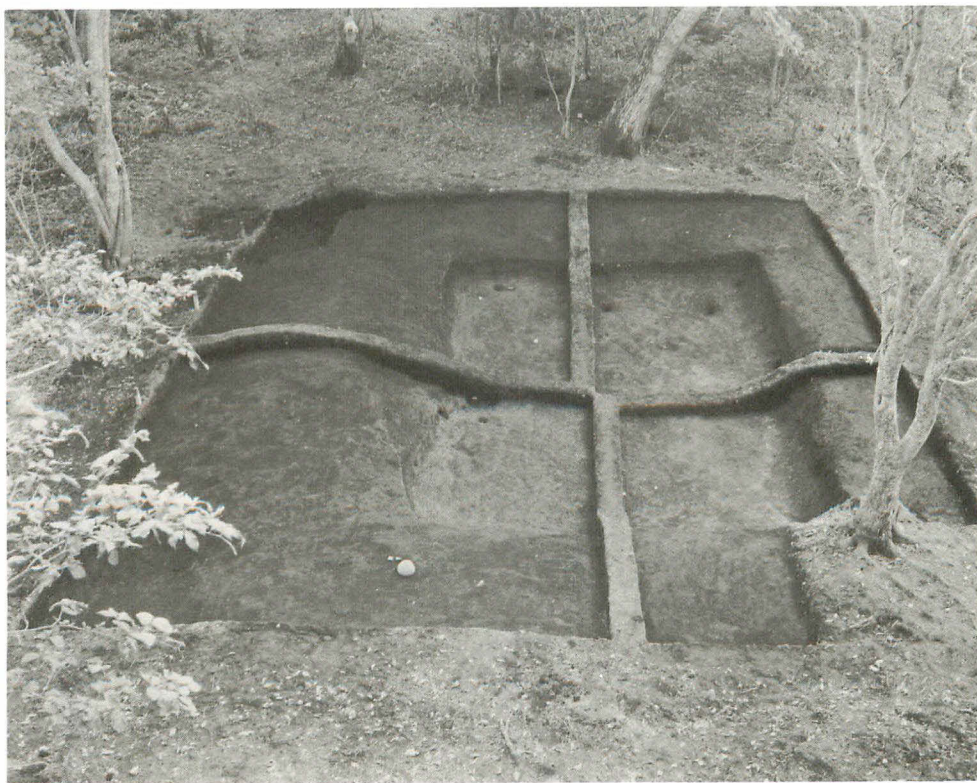
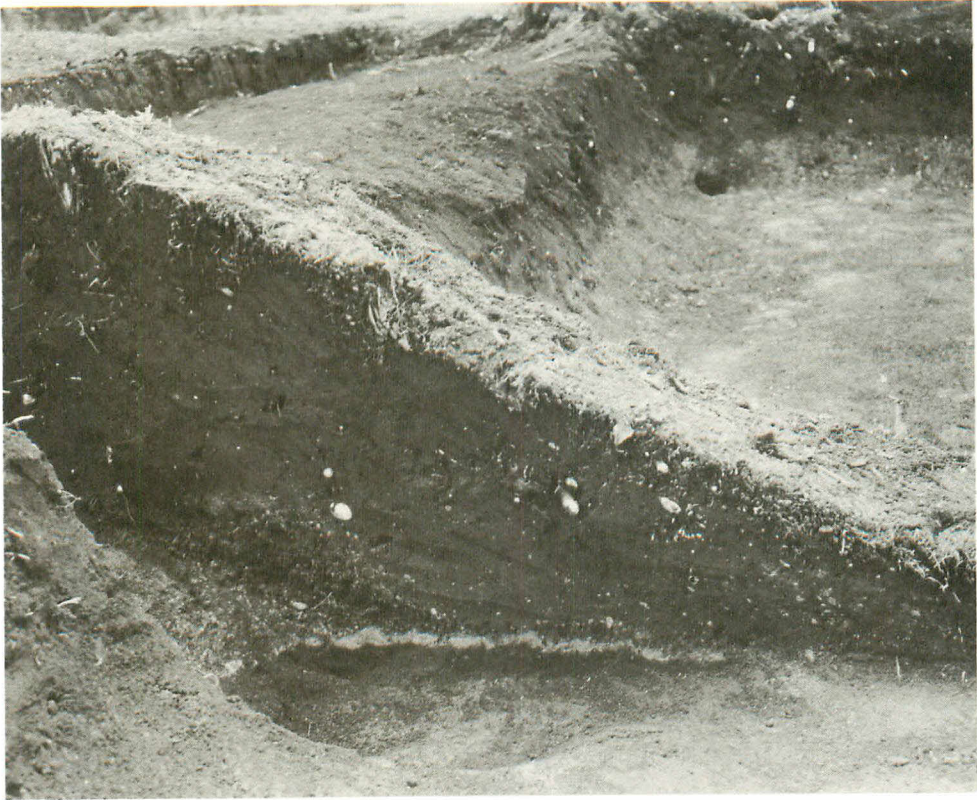
2　発掘終了後の状況（南方より）

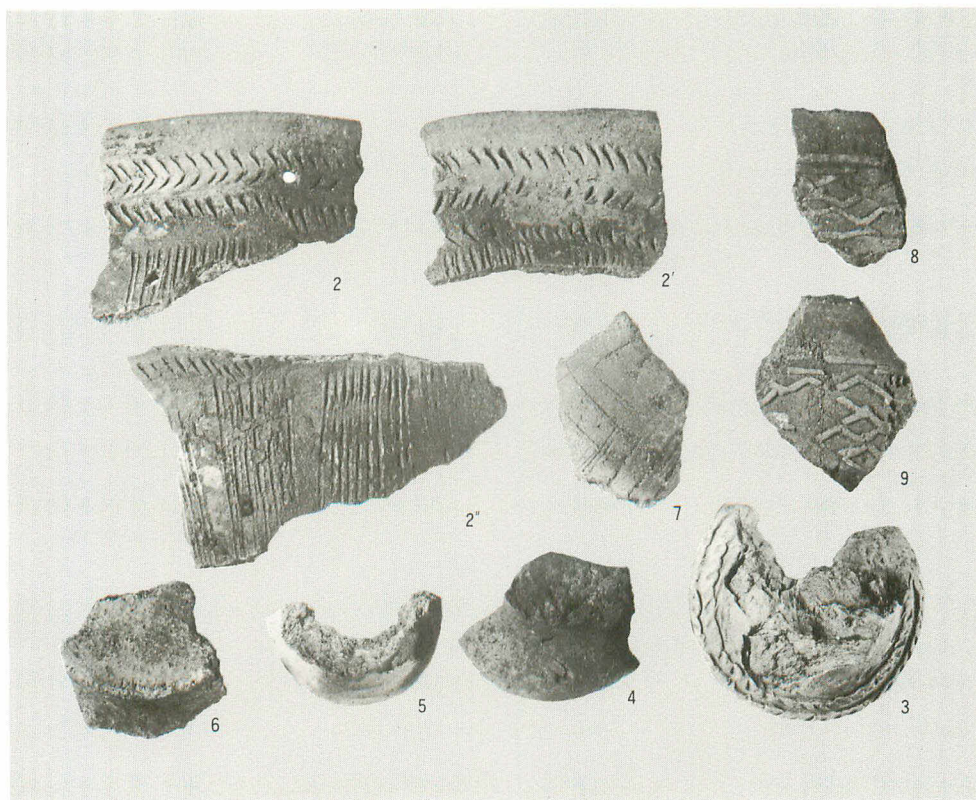
1　発掘終了後の状況（北方より）

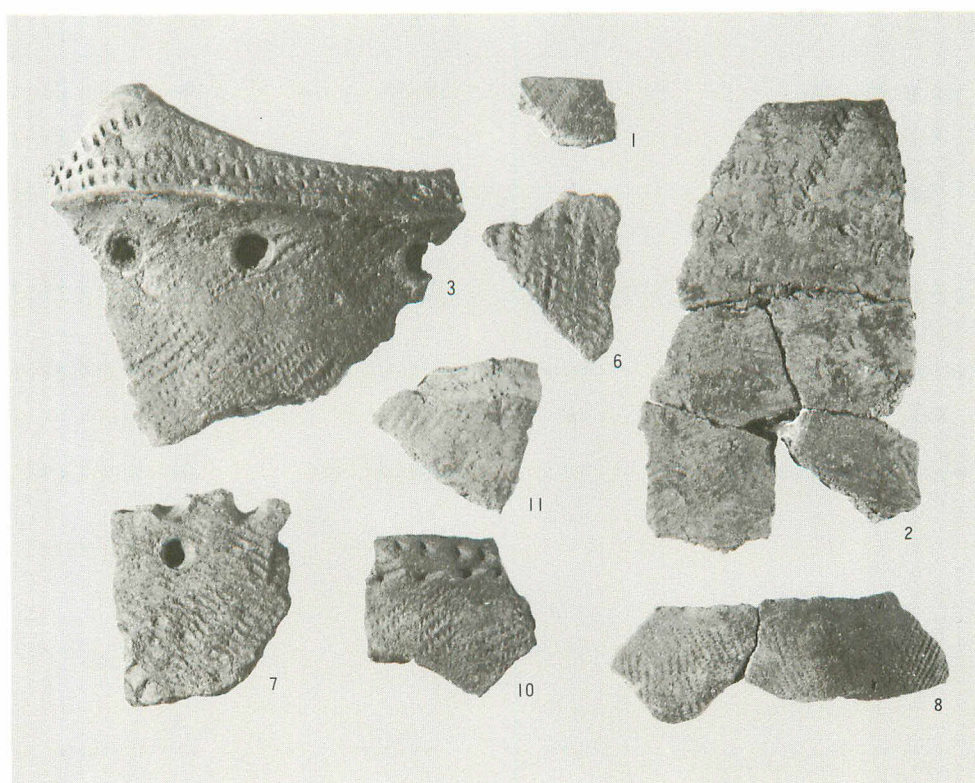
2　東壁遠望（西方より）

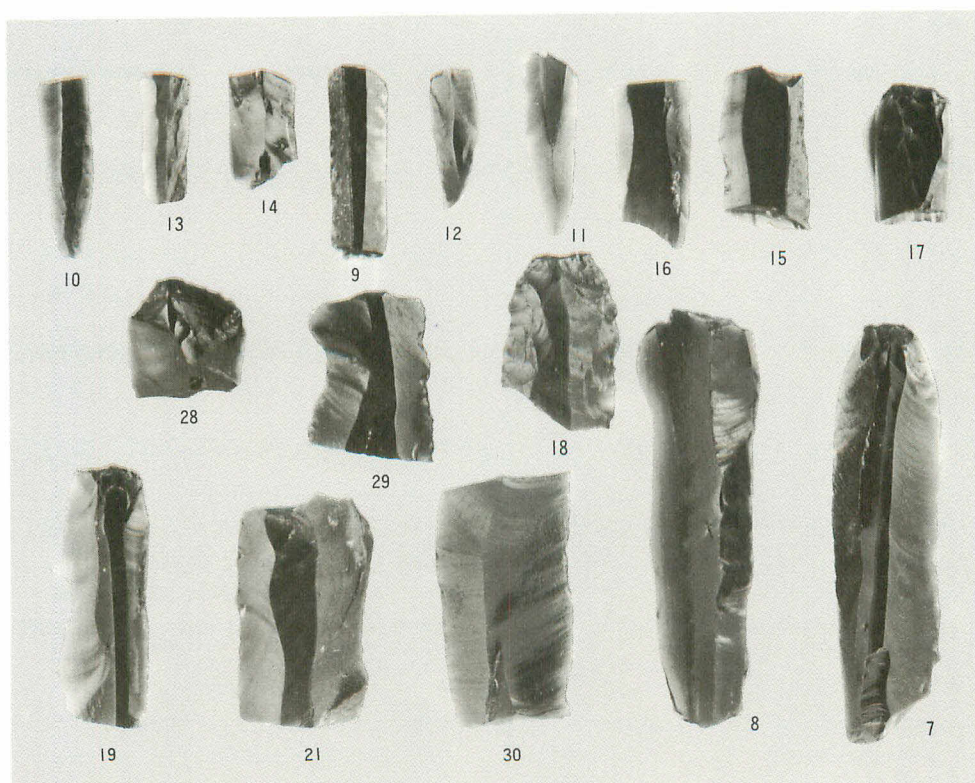
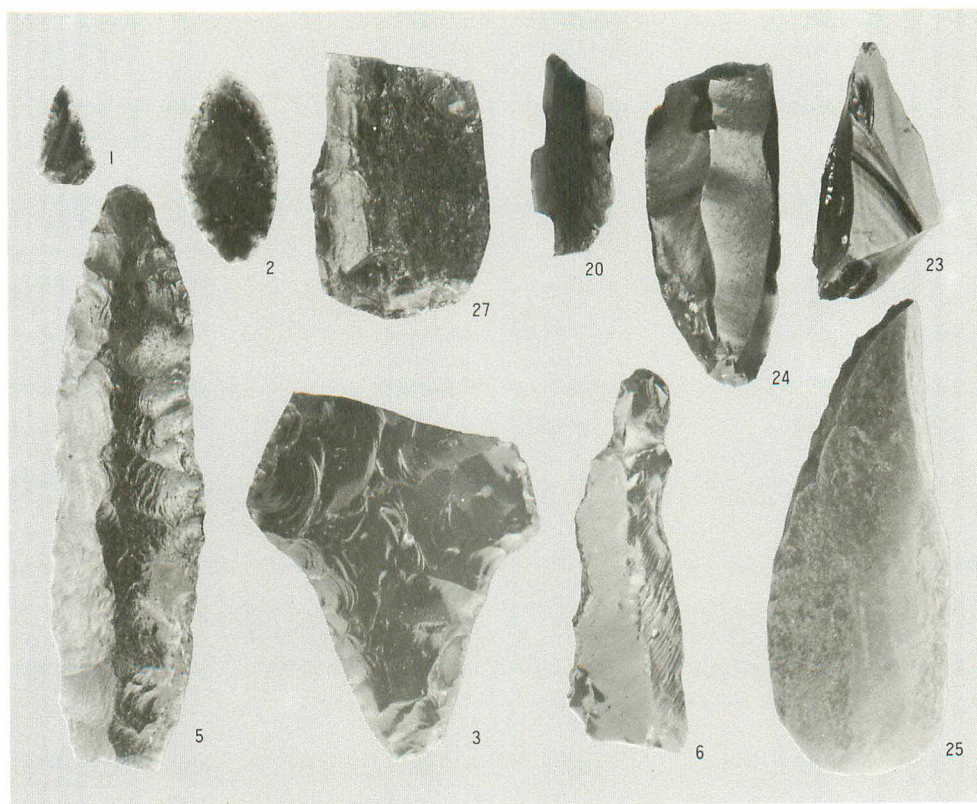
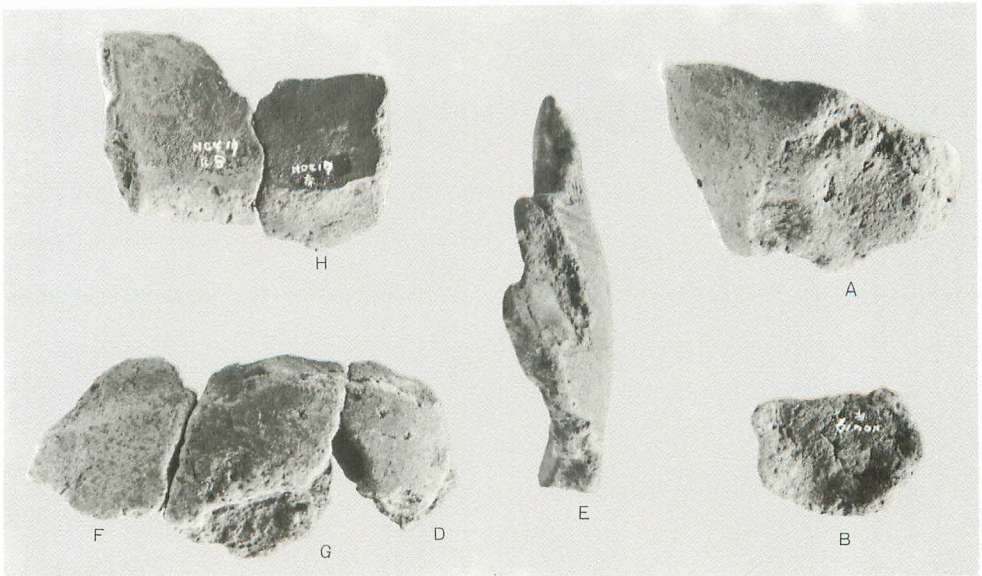
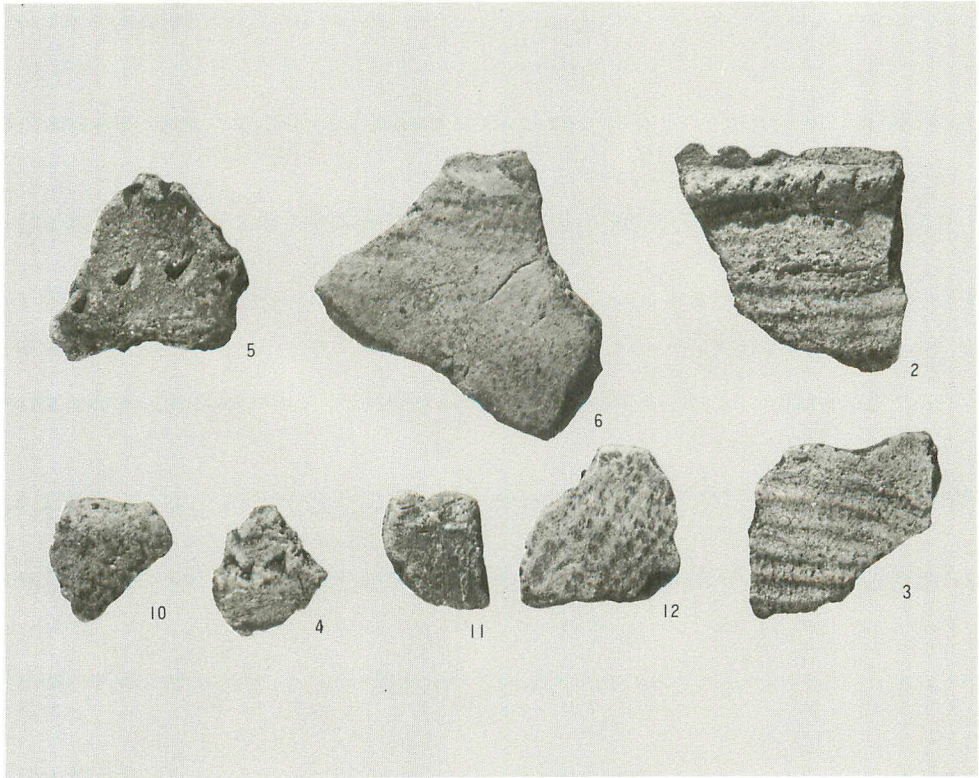
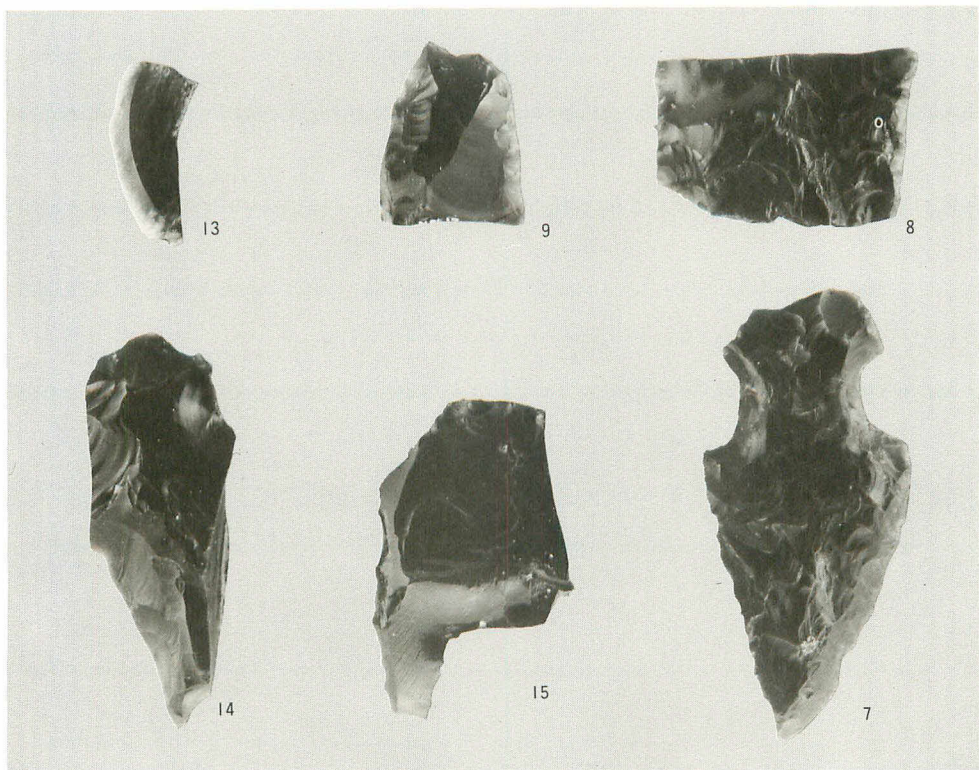
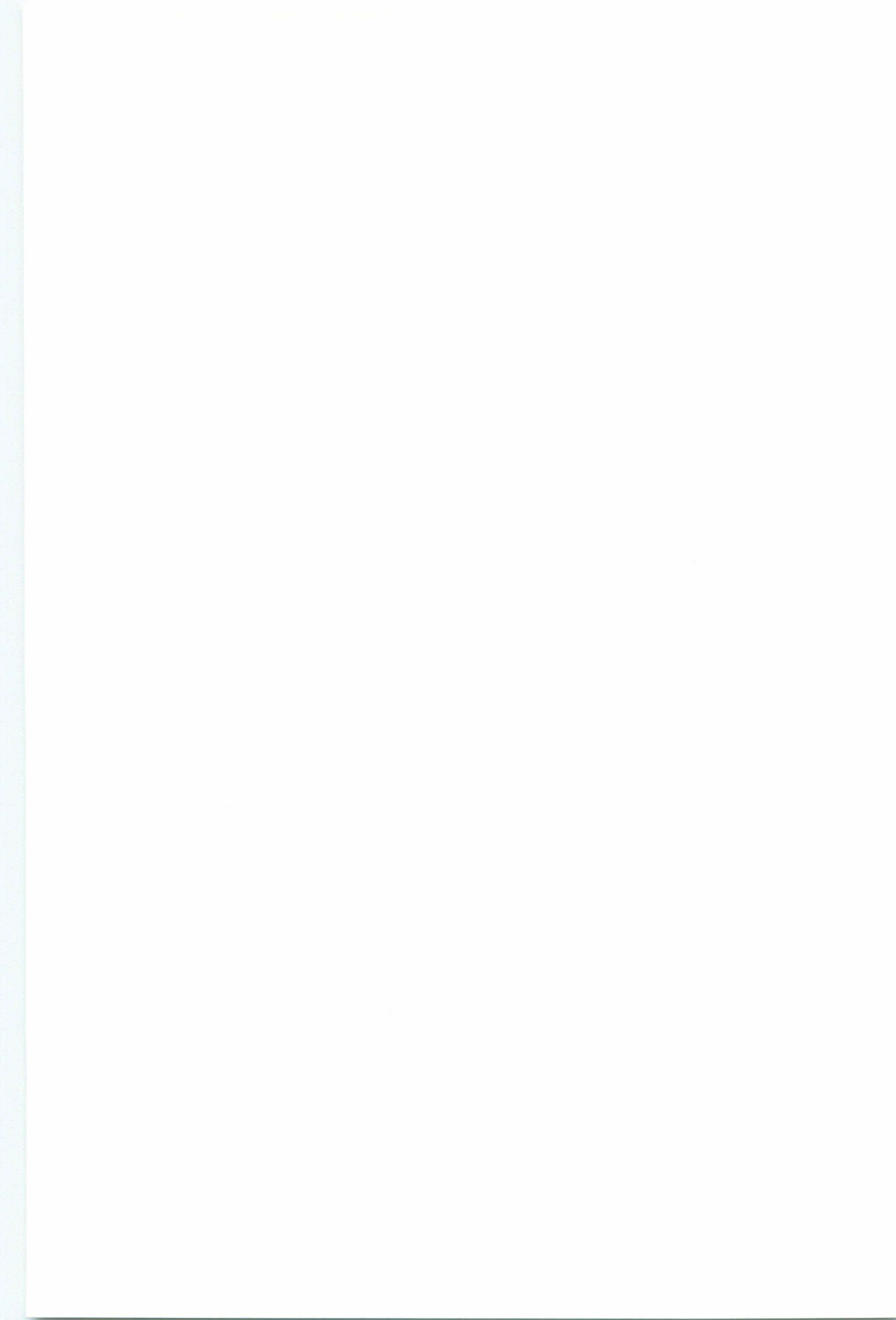
1　竈（西方より）

2　竈焚口出土土器（PL. 8参照）

1　東南区炭化屋根材出土状況（南方より）

2　編物出土状況

1　発掘前の状況（北方より）

2　発掘終了後の状況（北方より）

1　覆土堆積状況（南方より）

2　床面出土土器（PL.11参照）

焚口出土擦紋土器

1　擦紋土器・オホーツク式土器

2　縄紋土器

石器

床面出土擦紋土器・同細部（Fig.26参照）

1　続縄紋土器

2　石器

# 標津の竪穴

―昭和52年度標津町内遺跡
分布調査事業発掘報告書―

昭和53年3月
北海道根室支庁標津郡標津町教育委員会

印刷　関西プロセス
〒615 京都市右京区山ノ内山ノ下町13